

IV 九重沢Ⅲ遺跡

1 概 要

(1)面積と名称

調査面積は1,550㎡であった。調査区は市道を挟んで南北に分かれているため、北側に位置する調査区をA区、南側に位置する調査区をB区と名称を付けた。調査区は地形により大きく3つに分かれるため、尾根部・斜面部・斜面下部平坦部と呼称した。

(2)調査区の区割り

九重沢Ⅲ遺跡の区割設定は、調査区外に任意に打設した3級杭2点の世界測地系の座標を用いて調査区全体を網羅するよう設定した。任意の原点より100×100mの大グリッドを設定し、南北方向に北からⅠ・Ⅱとローマ数字をあて、東西にA・B…とアルファベット大文字をあてた。また4×4mの小グリッドも併せて設定した。小グリッドは南北に1・2…と算用数字を、東西にa・b…とアルファベット小文字をあてた。区画左上(北西隅)の杭をもって、その区画のグリッドの名称を表し、遺構の位置や遺物採集においては大小のグリッドの組み合わせでⅡA1aグリッドなどと表した。調査区内に打設した杭の座標は以下の通りである。

KJ301 : X = -75432.498m Y = 59775.283m Z = 314.793m

KJ302 : X = -75469.107m Y = 59817.941m Z = 309.840m

T- 1 : X = -75424.000m Y = 59752.000m Z = 317.914m

T- 2 : X = -75444.000m Y = 59756.000m Z = 318.349m

T- 3 : X = -75464.000m Y = 59780.000m Z = 315.972m

T- 4 : X = -75456.000m Y = 59784.000m Z = 315.148m

(3)粗掘・遺構検出と遺構精査と遺物

最初に県教育委員会生涯学習文化課により実施された試掘結果に基づき、調査区内に任意にトレンチを設定し、基本土層の確認を行った。その結果、上部平坦面では表土の直下に漸移層であるⅣ層を確認した。斜面部では地形改変の痕跡は確認できなかったが、黒色土で遺物を包含するⅡ層を確認した。下部平坦部では最近の攪乱による礫や丸太などの混入を確認した。

実際の作業は排土置場の関係上、B区は南側精査後に排土を反転して作業を行った。上部平坦面・下部平坦面はⅤ層上面まで、斜面部はⅡ層中位まで重機による掘り下げを行った。

遺構の検出は上部および下部平坦面ではⅤ層上面で行った。斜面部では遺物を任意グリッドで回収後、Ⅲ～Ⅳ層で遺構の検出を行った。

検出した遺構は、原則として土坑・焼土は2分法で行ったが、必要に応じてその他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影も随時行っている。

遺構内出土の遺物は随時写真撮影・図面作成をして取り上げた。遺構外出土の遺物については小グリッドごとに出土した層位を記して取り上げた。

(4)実測・写真撮影

平面実測は主に光波測量機器、電子平板を用いて実測および作図した。遺構断面図は遺構の種類を考慮し、竪穴住居跡や土坑類は1/20、炉跡・埋設土器・焼土は1/10の縮尺を基本とした。断面図で用いたレベルは3級杭のGPS測量の数値を用いた。

写真撮影は、デジタルカメラ6×45判モノクロによる撮影を行った。撮影に際しては、当センター所定の撮影カードの記入および写し込みを行い、撮影写真の整理に努めた。実際の撮影は、各種の埋土堆積状況や遺物の出土状況、完掘状況、全景などについて行い、調査終了段階でセスナによる空中写真撮影を行っている。

(5)調査の経過

平成26年

- 4月9日 資材搬入・調査開始
- 4月14日 重機による表土除去開始(A区・B区南側)
- 5月7日 第1回部分終了確認
- 5月12日 B区南側の作業終了し反転開始
- 6月3日 終了確認
- 6月5日 航空写真撮影
- 6月6日 調査終了

2 室内整理

(1)作業経過

作業人数や期間など大まかな流れのみ記載する

- 平成26年6月2日 整理作業開始 調査員つかず 作業員3名
- 平成26年7月1日～7月15日 調査員つかず 作業員4名
- 平成26年10月1日 整理作業再開 調査員つかず、作業員2名
- 平成26年11月4日～11月28日 調査員つかず、作業員3名
- 平成26年12月1日～12月15日 調査員つかず 作業員1名
- 平成26年12月16日～ 調査員つかず、作業員2名
- 平成26年12月22日～ 調査員合流 作業員2名
- 平成27年1月16日～ 調査員1名 作業員1名
- 平成27年3月31日 作業終了

3 基本層序

調査区は、尾根部・尾根から下る斜面部・斜面下の平坦部で構成される。本遺跡の基本層序(第1図)は、欠損層がなく、残存状態の良い平坦部に設定した2トレンチを基準として以下のように設定した。

I層：表土：腐植土層

II層：10YR1.7/1 黒色土 シルト しまり中 粘性中 遺物を包含する

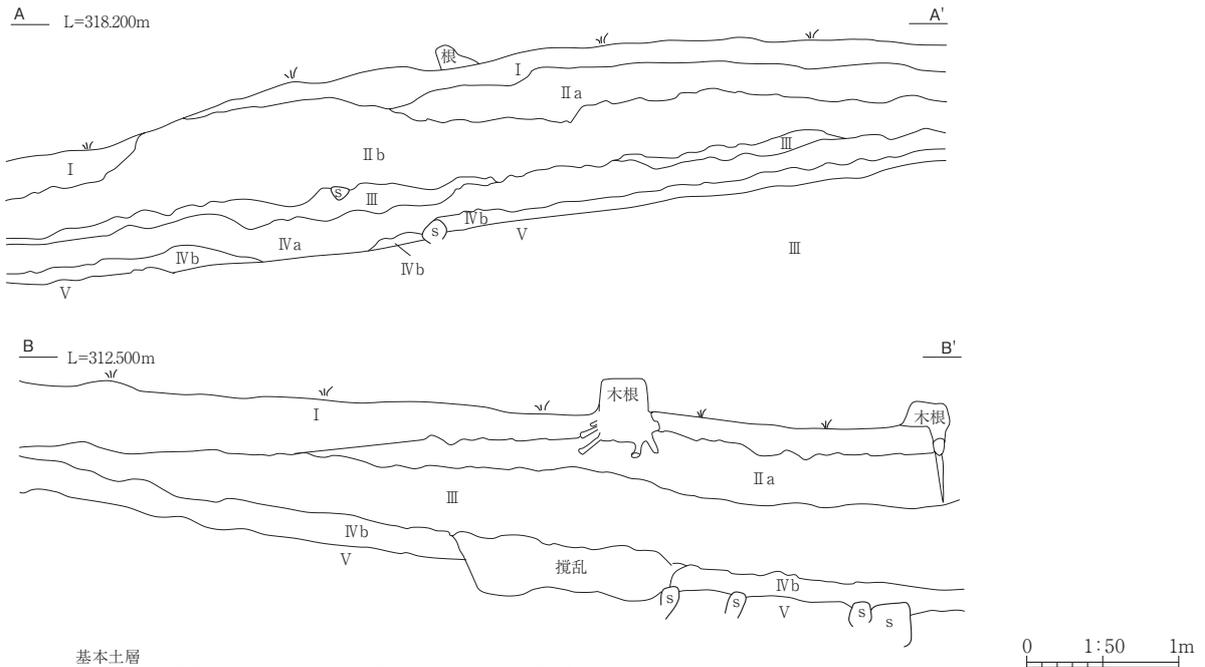
Ⅲ層：10YR3/2 黒褐色土 シルト しまり中 粘性中 漸移層

Ⅳ層：10YR5/8 黄褐色土 砂質シルト しまりやや強 粘性やや強 地山

Ⅱ層は平坦部でのみ確認できる遺物包含層で、層厚は20～40cmである。標高が低いほどⅡ層の層厚は厚くなる。遺物は縄文時代前期から中期後半まで確認できたが、中期中葉が主体である。

Ⅲ層は漸移層であり、平坦部のみ確認できた。

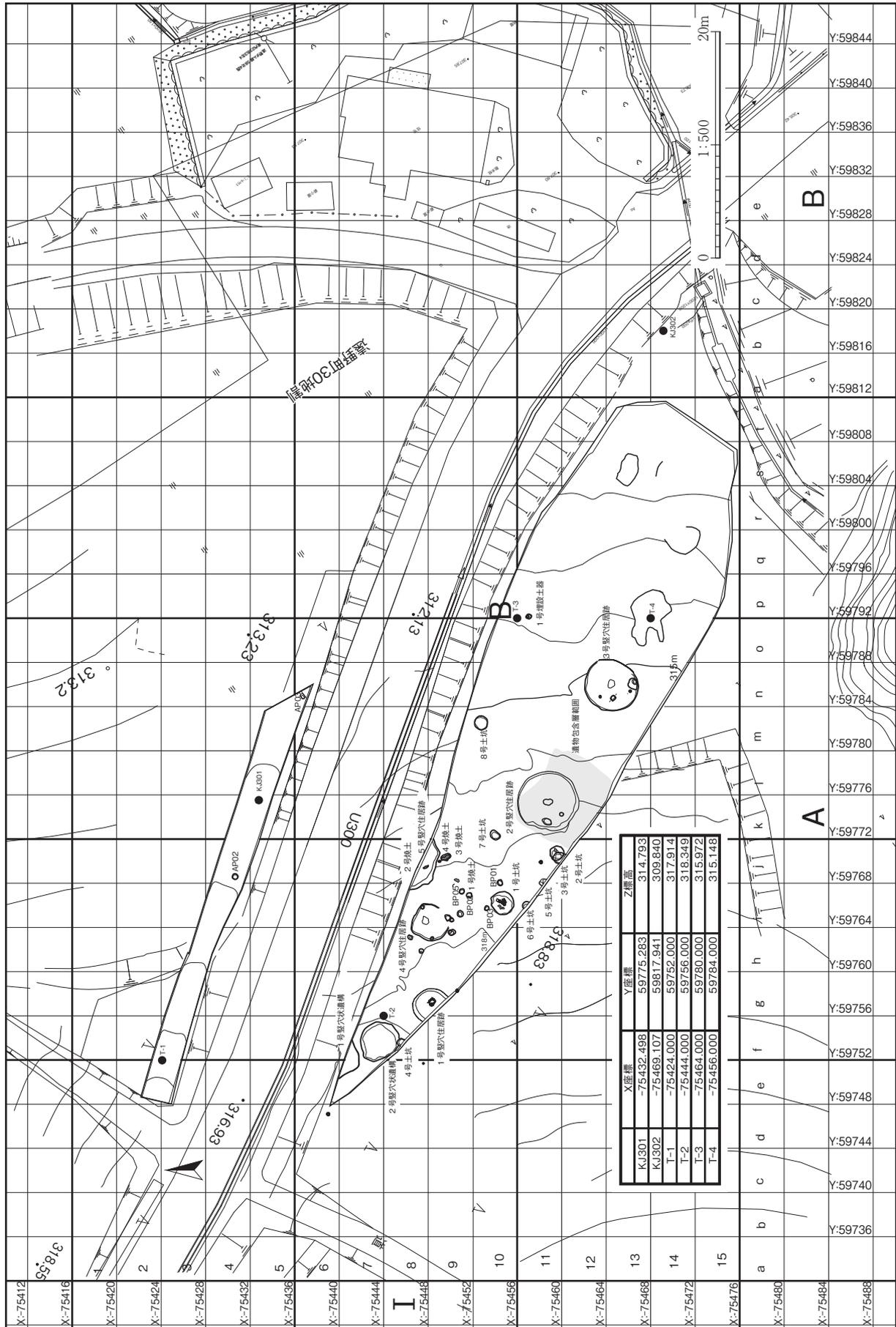
V層：10YR6/8 明黄褐色土 シルト 地山である。斜面部では直径3mm程度の風化花崗岩の粒子を確認できた。



基本土層

- I 10YR2/3 黒褐色粘質シルト しまりやや弱 粘性やや強 遺物微量含む 腐植土
- IIa 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性やや弱 上部は植物根あり 花崗岩粒(φ1mm)20%含む
- IIb 10YR2/1 黒色シルト しまり中 粘性中 植物根あり 部分的10YR6/1褐灰色水成ラミナあり
- III 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりやや強 粘性やや強 遺物含む また遺構の埋土になることもある。
- IVa 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまり中 粘性中 III層由来黒色シルトブロック(φ5cm)5%、V層由来ブロック(φ5cm)3%含む
- IVb 10YR5/8 黄褐色粘質シルト しまりやや強 粘性中 IVa層ブロック(φ5～10cm)10%含む
- V 10YR6/8 明黄褐色シルト しまり強 粘性弱 花崗岩(φ5～50cm)、花崗岩粒(φ1～10mm)10%含む 最終遺構確認面

第1図 基本層序



第2図 遺構配置図

4 検出された遺構

調査の結果、A区から柱穴状土坑2個、B区から竪穴住居跡5棟、竪穴状遺構2棟、埋設土器1箇所、フラスコ状土坑を含む土坑8基、焼土遺構4基、柱穴状土坑6個、遺物包含層1箇所を検出した。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡はB区のみで検出した。円形や隅丸方形の掘り込みを持ち、床面に炉跡・焼土が確認できたものを竪穴住居跡として取り扱った。

1号竪穴住居跡(第3図、写真図版3)

〈位置・検出状況〉B区の西、上部平坦面のIA8g・IA9gグリッドに位置する。遺構確認は、表土除去後のIV層上面で行った。

〈重複関係〉重複する遺構はなかった。遺構の南側が調査区外に延びる。

〈形状・規模〉規模は残存する範囲で南西-北東1.90m、南東-北西3.20mの確認できた範囲で半円形を呈する。検出段階で遺構埋土はほぼ削平されていたが、調査区壁面に遺構埋土が残存しており、確認面からの深さは25cmである。断面形状は調査区壁面の観察から、緩やかに立ち上がる逆台形状を呈する。床面は概ね平坦であり、調査区北側に向けて緩やかに傾斜する。

〈堆積土〉石囲炉埋土を含む3層に区分した。2・3層は石囲炉埋土である。2層は焼成面で、3層は石囲部の掘り方とみられる。住居埋土の1層は自然堆積と見られる。

〈床面施設〉石囲炉1基を確認した。南西部が一部木根によって攪乱を受けているが、規模は長軸0.68m、短軸0.57mの円形を呈し、小礫を使用して石囲部を形成する。

〈遺物〉堆積土中からミニチュア土器が出土し、1点掲載した(84)。施文はなく詳細な時期は不明である。

〈分析鑑定〉本遺構から出土した炭化物のC¹⁴年代は、4070±30yrBP、暦年較正年代(1σ)は、縄文時代中期後葉から末葉頃相当するとの分析結果を得た。

〈時期〉遺物は出土していないが、年代測定の結果から縄文時代中期後葉から末葉に属すると考えられる。

2号竪穴住居跡(第4図、写真図版4・5)

〈位置・検出状況〉B区の西、上部平坦面のIA11~12k~1グリッドに位置する。遺構確認は、表土除去後のIV層上面で行った。

〈重複関係〉重複していない。北西部が攪乱を受けており、壁面の3分の2が削平されている。

〈形状・規模〉規模は残存する範囲で北東-南西5.17m、南東-北西5.41mの円形を呈すると見られる。確認面からの深さは40~45cmである。断面形状は外傾しながら立ち上がっている。床面は概ね平坦であり、壁面の削平された北西部でも残存する地点が見られる。また、礫層が壁面・床面ともに露出する。

〈堆積土〉6層に区分した。4・5層はレンズ状の堆積をしており、花崗岩粒も壁面からの崩落土と考えられ自然堆積と考えられる。4・5層に含まれる焼土粒は、在地性ではなく、流れこみと判断した。

〈床面施設〉床面から住居内土坑1基、柱穴1個を確認した。土坑は住居南西壁付近に位置する。断面形状は開口部に向けて外傾しており、床面からの深さは39cmである。堆積土は黒褐色土であり、炭化物粒を少量含む。柱穴は住居南側に1個確認した。堆積土は暗褐色土で、自然堆積とみられる。床面

からの深さも10cm未満である。

また、住居中央部から焼土を確認した。直径0.68×0.40mで、南東から北西に延びる楕円形を呈している。周辺に炉石の抜き取り痕や、掘り込みが確認できず、地床炉であると考えられる。

〈遺物〉堆積土から土器が出土し、11点を掲載した(1～11)。6は小型の壺である。全体に文様はなく、詳細な所属時期は不明である。10は注口である。粘土粒貼付を行っているため、後期後葉に属すると考えられる。また、ミニチュア土器が出土した(92)。内面に漆のようなものが確認できる。土偶右足が出土している(97)。石器類も石鏃・石匙・敲磨石が出土している。

〈分析鑑定〉本遺構から出土した炭化物のC¹⁴年代は、4070±30yrBP、暦年較正年代(1σ)は、縄文時代中期後葉から末葉頃相当するとの分析結果を得た。

〈時期〉分析鑑定から縄文時代中期後葉以降に属すると考えられる。

3号竪穴住居跡(第5図、写真図版6)

〈位置・検出状況〉B区の東、下部平坦面のI A12～13nグリッドに位置する。表土除去後のIV層上で黒褐色土と暗褐色土の広がりでも確認した。

〈重複関係〉重複する遺構はないが、斜面下部にあたる南東側が攪乱を受けており、明確な立ち上がりをとらえることができなかった。

〈形状・規模〉規模は北東-南西4.80m、残存する範囲で北西-南東約4.00mの円形を呈する。確認面からの深さは20～30cmである。断面形状は、確認できた範囲では外傾しながら立ち上がる。床面は礫により凹凸があり、斜面の傾斜に沿って緩やかに傾斜している。

〈堆積土〉5層に区分した。壁際に堆積する2・3層には壁面から崩落したと考えられる地山ブロックが含まれている。5層は炉である。堆積土からスタンプ状土製品、小型の鉢が出土した。堆積土はレンズ状堆積であるため、自然堆積と考えられる。石器類は剥片が出土している。

〈床面施設〉床面から土坑1基、柱穴2個を確認した。土坑は南隅に位置し、開口部が広く底部が狭くなる形状を呈しており、床面からの深さは24cmである。堆積土は黒褐～暗褐色土を主体とし、黄褐色土の混入が確認できる。堆積土の状態から自然堆積土であると考えられる。堆積土から炭化物などは出土しなかった。柱穴は東側に2個確認し、いずれも逆台形状を呈し床面からの深さは10cm未満である。堆積土は黒色土であり、地山土粒を含む。自然堆積であると考えられる。

また、住居中央から焼土を確認した。直径0.80mの不整楕円形を呈する。被熱深度は8cmほどである。周辺には掘り込みなどは確認できず、地床炉であると考えられる。

〈遺物〉堆積土中から土器が出土し、2点掲載した(12・13)。12は堆積土中から出土した小型の完形深鉢である。丸縁で異方向羽状縄文を施文し、沈線で区画し磨消を行っている。また、13は深鉢の口縁部破片で多重沈線を用いて円を描いている。文様の特徴から後期前葉から中葉に属すると考えられる。また、スタンプ状土製品も出土している(104)。

〈時期〉出土遺物から縄文時代後期前葉から中葉に属すると考えられる。

4号竪穴住居跡(第6図、写真図版7・8)

〈位置・検出状況〉B区の西、上部平坦面のほぼ中央I A8～9iグリッドのⅢ～Ⅳ層で検出した。周辺には5号竪穴住居跡や1号土坑などが位置している。当初、注口土器が出土したP7は単独の遺構であると考えたが、本遺構に付属する柱穴と判断した。

〈重複関係〉重複する遺構はないが、南東隅の立ち上がりが明確に確認できなかった。本遺構の南側は

遺構の残存状態がよくなく、けずられてしまったものと考えられる。

〈形状・規模〉規模は周囲の柱穴を含まず、掘り込みの範囲では北東-南西で3.20m、北西-南東で3.15mである。掘り込みの形状は隅丸方形を呈する。立ち上がりの南側は削られているため確認できないが、確認できた範囲ではやや外側に開くように立ち上がる。

〈堆積土〉8層に区分した。6・7層は床面に堆積した土である。6層は地山である花崗岩の風化粒を含んでいる。6・7層が堆積をしていることから、自然堆積であると考えられる。また、8層は床面で確認された地床炉の被熱変色範囲である。

〈床面施設〉床面と掘り込みの周辺から柱穴と思われる掘り込みを8個確認した。うち、2個は掘り込みの内側、6個は掘り込みの外に位置する。P 1・2は東隅と西隅に位置する。いずれも床面から約10cmの浅いものである。北隅に位置する柱穴は確認できず、P 3もしくはP 4が南隅の柱穴になると考えられる。P 3・4はいずれも確認面から20cmほどの深さである。周辺に位置する柱穴のP 5～8はおおよそ各壁に2基ずつ作られていた可能性が考えられる。南壁に付属すると考えられるP 5・6はいずれも確認面からの深さは約25cmである。断面形状も外側に開く逆台形状である。東壁に付属すると考えられるP 7・8は確認面からの深さはP 7で40cm、P 8は28cmである。P 7では注口土器が見つかっており(23)、横位に倒れており、口縁部の欠損以外に欠損はない。器面は丁寧に整えられ、沈線により装飾が施され、文様の交点には粘土粒の貼付が施される。確認できた柱穴の堆積土はいずれも黒褐色シルトで、地山粒やブロックを含む単層である。

また、住居中央よりやや北側で焼土を確認した。直径0.8×0.6mの不整楕円形を呈する。被熱深度は10cmほどである。周辺には掘り込みなどは確認できず、地床炉であると考えられる。

〈遺物〉堆積土中から土器が出土し、13点掲載した(14～26)。17は肩部が張り出す形状の壺である。17・18も異方向羽状縄文を施文し、沈線で区画し磨消を行っている。さらに粘土粒貼付も行っている。23もP 7から出土した注口で粘土粒を貼り付けている。この文様の特徴から後期後葉に属するものと考えられる。また土偶の胸下～臀部にかけての破片が出土している(98)。石器類は石鏃・磨製石斧・敲磨石が出土している。

〈時期〉出土遺物から縄文時代後期後葉に属すると考えられる。

5号竪穴住居跡(第7図、写真図版9)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面のほぼ中央、I A 8～9 j グリッドに位置する。II層除去後に焼土・遺物の広がりでも確認した。遺構の北東側が調査区外に位置する。

〈重複関係〉重複する遺構はない。周辺には焼土遺構が位置する。また、少し離れた位置に4号竪穴住居跡が位置する。

〈形状・規模〉確認できた範囲では東西約4.80m、南北1.35mの円形を呈する。確認面からの深さは82cmである。断面形状は逆台形状に外側に開く。床面は礫などが点在していたが、ほぼ平坦である。

〈堆積土〉堆積土は10層に区分した。いずれも黒褐色土を基調とし、地山から混入したと考えられる花崗岩粒やブロックが認められる。全体的にレンズ状の堆積をしていることから、自然堆積であると考えられる。遺物も含んでおり特に3層に多く、4層との境でも多く含まれている。また、堆積土中に比較的大きな焼土ブロックが確認できた。焼土は比較的状态もよく、塊も大きいので焼失住居の可能性が考えられる。また、堆積土中位から土錘が出土した。

〈床面施設〉確認できなかった。

〈遺物〉堆積土中から土器が出土し、12点掲載した(27~38)。27は大型の深鉢である。地文縄文だけの施文である。33は台付である。坏部は欠損しているが、多重沈線による文様が確認できる。文様の特徴から後期後葉に属すると考えられる。35は表面裏面ともに文様が施文されている表裏縄文の破片で縄文時代前期に属すると考えられる。36は内外面ともに赤彩が施されている。石器類は石鏃・剥片・敲磨石が出土している。

〈時期〉出土遺物から縄文時代後期中葉から後葉に属すると考えられる。

(2) 竪穴状遺構

竪穴状遺構も B 区のみで確認した。住居状の掘り込みを持ち、焼土や炉を持たないものをあつかった。

1号竪穴状遺構(第7図、写真図版10)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面の西側、I A 7 e~f グリッドに位置する。I層除去後に黒褐色土の広がり確認した。遺構の北側が調査区外に延びるため詳細は不明である。

〈重複関係〉重複する遺構はなく、周辺には2号竪穴状遺構が位置する。また、少し離れた位置に1号竪穴住居跡が位置する。

〈形状・規模〉確認できた範囲で、東西3.60m、南北1.35mの隅丸方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは10cmで断面形状は外反しながら立ち上がり、逆台形状を呈する。また、床面は細かな凹凸が確認できた。

〈堆積土〉堆積土は地山ブロックを含む単層で、断面にレンズ状の堆積を確認できなかったことから人為堆積であると考えられる。また、堆積土中から遺物は出土しなかった。

〈床面施設〉確認できなかった。

〈遺物〉堆積土中からミニチュア土器が1点出土した(88)。器面には縄文が施文されているが、詳細な所属時期は不明である。また土偶の右手に位置する破片が出土した(96)。

〈時期〉時期の判別できる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

2号竪穴状遺構(第8図、写真図版10・11)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面の西側、I A 7~8 f グリッドに位置する。I層除去後に黒褐色土の広がり確認した。

〈重複関係〉遺構の南端で4号土坑と重複し、本遺構の方が古い。また、周辺には1号竪穴状遺構が位置する。

〈形状・規模〉北西-南東3.85m、北東-南西3.30mの不整楕円形状を呈する。確認面からの深さは30cmで、断面形状は外傾しながら立ち上がり、逆台形状を呈する。床面は中央部がやや窪み、凹凸がやや多いが周辺には凹凸が少なく平坦である。

〈堆積土〉堆積土は5層に区分した。いずれも堆積土中に地山土粒や地山ブロックなどを含み、レンズ状の堆積が確認できることから、自然堆積であると考えられる。

〈床面施設〉確認できなかった。

〈遺物〉堆積土中から遺物は出土しなかった。

〈時期〉詳細な時期が判別できる遺物が出土しなかったが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると

考えられる。

(3)埋 設 土 器

B区で1基確認した。

1号埋設土器(第8図、写真図版11)

〈位置・検出状況〉B区の下部平坦面の北側、I A11 p グリッドに位置する。表土除去後のV層上面で、土器と黒～黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉重複する遺構はなく、周辺には3号竪穴住居跡が位置する。

〈形状・規模〉掘り方は長径0.52m、短径0.44mの不整楕円形状を呈する。確認面からの深さは15cmである。断面形状は西側が外傾しながら立ち上がるが、東側は西側と比較すると直線的に立ち上がる。底面は凹凸が少ない。

〈堆積土〉堆積土は3層に区分した。いずれも黒～暗褐色土であるが、1・2層が土器内に堆積していたものである。また2層中に礫や土器片が含まれている。礫に関しては遺物ではなく、自然礫であった。

〈遺物〉埋設されていた土器を1点掲載した。口縁部から胴上半部が欠損している深鉢である。器面には捺糸文(r)が縦方向に施文されている。文様などの特徴から縄文時代中期中葉であると考えられる。

〈時期〉遺物の特徴から縄文時代中期中葉に属すると考えられる。

(4)土 坑

1号土坑(第8図、写真図版11)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面のI A10 i グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で、黒色土と遺物の広がりで確認した。

〈重複関係〉重複する遺構はなく、周辺には2・4号竪穴住居跡が位置する。

〈形状・規模〉開口部2.30×2.10mの不整円形を呈し、底径は2.09×1.70mの不整楕円形状を呈する。確認面からの深さは85cmである。西側がややオーバーハングしている。断面形状は確認面のすぐ下でくびれ、底部に向けて開く形状になる。底面はほぼ平坦であるが、礫が露出する。

〈堆積土〉堆積土は21層に区分した。底面の19～21層は黒色土でわずかに炭化物を含んでいることから、本遺構が使用された時に残った有機物の可能性があり、14・18層は崩落した壁面の可能性がある。遺物の堆積状態から、本遺構が埋没した後に黒色土を掘り返し、そこに遺物を投げ入れたと考えられる。そのため、本来は新・旧の二段階で遺構の利用があったと考えられる。

〈遺物〉遺物は遺構内から出土した土器4点を掲載した(39～41・45)。40は胴上部が張り出す器形で器面には文様が施文されていない。39・45は大きく傾いており、口縁部が無文で胴部には地文が施文されている。

〈時期〉出土遺物から後期中葉に属すると考えられる。

2号土坑(第9図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面I A11 j グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で遺構検出を行った。

〈重複関係〉3号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

〈形状・規模〉長径1.30m、短径1.20mの不整楕円形状を呈する。確認面からの深さは25cmである。断

面形状は北側には段を持ち、外傾しながら立ち上がる。南側は、やや垂直気味に立ち上がる。底面は中央部がやや窪む。

〈堆積土〉堆積土は3層に区分した。いずれも黒～黒褐色土を基調とし、炭化物や地山土粒を含んでいる。また堆積土中に礫を含んでいる。この礫は人為的に入れられたものであると考えられる。本遺構は3号土坑が埋没した後に新たに作られた土坑である。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

3号土坑(第9図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面 I A 11 j グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で遺構検出を行った。

〈重複関係〉2号土坑と重複し、本遺構が古い。また、南端が調査区外に位置するため詳細は不明である。

〈形状・規模〉確認できた範囲で、長径1.00m、短径0.80mであるが、不整楕円形状を呈すると考えられる。確認面からの深さは60cmである。断面形状は外傾しながら立ち上がると考えられる。底面は平坦である。

〈堆積土〉堆積土は3層に区分した。いずれも黒～黒褐色土を基調とする。3層には焼土がわずかに含まれる。堆積状況から人為堆積であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

4号土坑(第9図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面の I A 8 f グリッドに位置する。表土除去後のIII層上面で確認した。

〈重複関係〉2号竪穴住居状遺構と重複し、本遺構が新しい。また、遺構の南側が調査区外に延びているため詳細は不明である。

〈形状・規模〉確認できた範囲で長径0.68m、短径0.44mである。楕円形状を呈すると考えられる。確認面からの深さは58cmである。断面形状はほぼ直線的に立ち上がる。底面は礫が露出しているものの、ほぼ平坦である。

〈堆積土〉3層に区分した。いずれも黒～黒褐色土を基調とし、すべてに炭化物を含んでいる。堆積状況から自然堆積であると考えられる。

〈遺物〉堆積土中から土器が出土し、1点掲載した(42)。文様の特徴から縄文時代後期後葉に属すると考えられる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代後期後葉に属すると考えられる。

5号土坑(第9図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面の I A 11 i・11 j グリッドに位置する、表土除去後のIV層上面で遺構を確認した。

〈重複関係〉重複する遺構はなく、遺構の南側が調査区外に延びているため詳細は不明である。

〈形状・規模〉確認できた範囲で長径0.70m、短径0.40mである。楕円形状を呈すると考えられる。確認面

からの深さは58cmである。断面形状は東側には巨大な礫が露出しているため、判断が難しいが、西側ではほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。このことから、本遺構を掘る際に巨大な礫が露出したが、土坑としてそのまま利用していたことが明らかになった。

〈堆積土〉堆積土は6層に区分した。いずれも黒～黒褐色土を基調とし、地山ブロックや地山土粒などの地山由来の混入物を含んでいる。また3層中に遺物を含んでいる。自然堆積であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

6号土坑(第9図)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面のI A11 i グリッドに位置する。遺構の確認は表土除去後のIV層上面で行った。

〈重複関係〉重複する遺構はないが、遺構の南側が調査区外に延びているため詳細は不明である。

〈形状・規模〉確認できる範囲で長径0.75m、短径0.40mである。平面形は円～楕円形状を呈すると考えられる。確認面からの深さは30cm、断面形状はやや外傾しながら立ち上がる逆台形状を呈する。底面は中央部がわずかに窪むが、ほぼ平坦である。

〈堆積土〉縦2層に区分した。2層には褐色土のブロックを多く含んでいる。堆積状況から自然堆積であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

7号土坑(第9図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉B区の上部平坦面I A10 j・10k グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で遺構の確認を行った。

〈重複関係〉重複する遺構はなく、周辺には3・4号焼土が位置する。

〈形状・規模〉長径0.90m、短径0.70mの北東-南西に長い楕円形状を呈する。確認面からの深さは28cmである。断面形状はやや丸みをおびて垂直に立ち上がる。底面は礫の露出があるが、ほぼ平坦である。

〈堆積土〉3層に区分した。いずれも地山の混入が確認できる。堆積状況から自然堆積であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

8号土坑(第9図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉B区の下部平坦面の北I A10m グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で遺構の確認を行った。

〈重複関係〉重複する遺構はなく、周辺には3号竪穴住居跡が位置する。

〈形状・規模〉長径1.25m、短径1.20mの不整円形を呈する。確認面からの深さは50cmである。断面形状は北側がややオーバーハングし、南側は中央部でやや膨らみを持ちながら立ち上がる。底面には礫が露出しているがほぼ平坦である。

〈堆積土〉3層に区分した。2層には地山由来土が多く含まれていた。3層が斜堆積をしていることから自然堆積であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

(5) 焼土遺構

焼土遺構はB区で4基確認した。以下に各焼土遺構の特徴を述べる。

1号焼土遺構(第10図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉B区の上段北側、SI06付近のI A 9 j グリッドのⅢ層上面で検出した。当初竪穴住居跡の炉跡であると想定して精査を行ったが、当遺構に伴う竪穴住居跡は確認できず、単体の焼土遺構として取り扱った。

〈形状・規模〉平面形状は0.45×0.25mの不整楕円形で、やや中央がくぼむ形状をなす。被熱深度は約6cmであり、現地性の焼土であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

2号焼土遺構(第10図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉B区の上段北側、I A 8 j グリッドのⅣ層上面で検出した。

〈形状・規模〉平面形状は0.50×0.18mの東西に長い不整楕円形を呈し、細かいくぼみを持つ。被熱深度は約4cmであり、現地性の焼土であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

3号焼土遺構(第10図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉B区の上段北側5号竪穴住居跡の付近I A 9 j グリッドでⅣ層上面で検出した。すぐ北側には4号焼土が位置している。

〈形状・規模〉0.88×0.40mの東西に長い不整楕円形を呈する。被熱深度は約10cmであり、現地性の焼土であると考えられる。

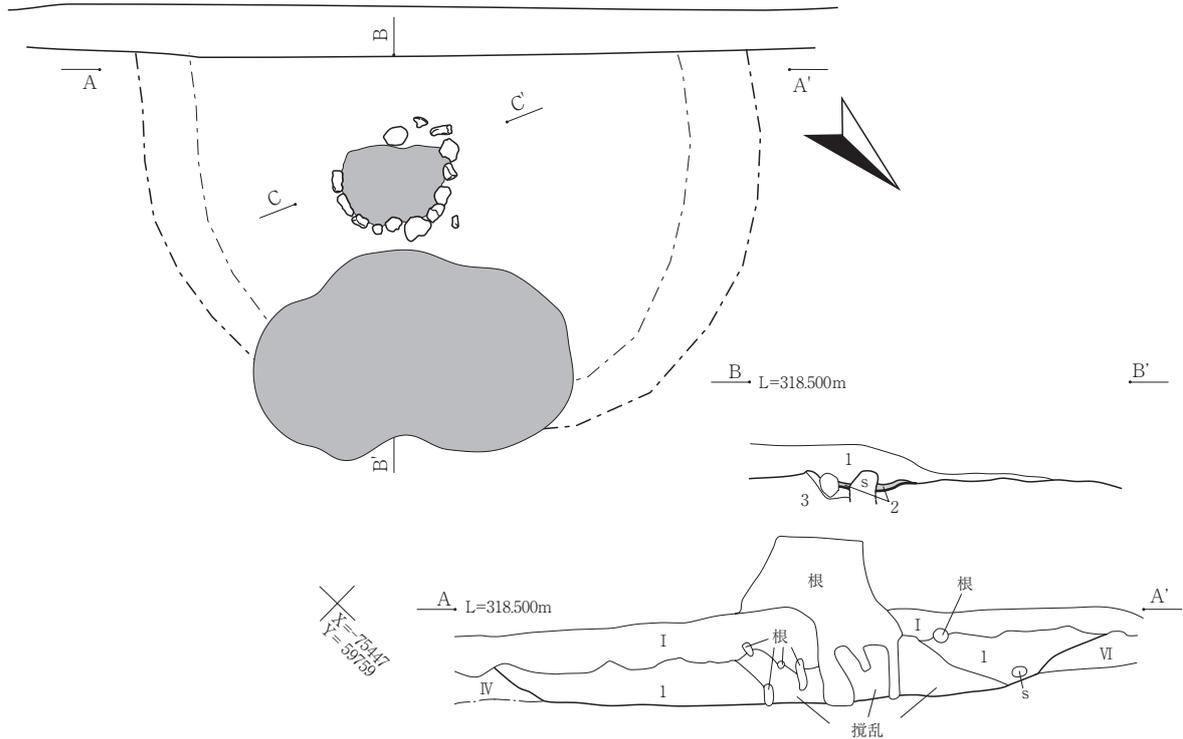
〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

4号焼土遺構(第10図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉B区の上段北側6号竪穴住居跡付近のI A 9 j グリッドでⅣ層上面で検出した。すぐ南側に3号焼土が位置する。

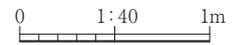
1号竪穴住居跡



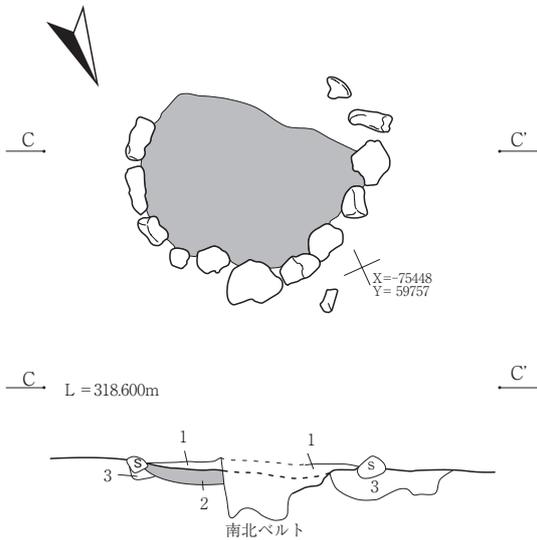
1号竪穴住居跡

- 1 10YR4/4 褐色シルト しまりやや疎 粘性やや強 焼土 (5YR4/8: 赤褐色) ブロック3%, 暗褐色シルトブロック10%, 炭化物粒10%含む
- 2 5YR4/8 赤褐色焼土 しまりやや密 粘性やや強 炭化物粒1~2%含む
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト しまり密 粘性やや強 混入なし

X=-75447
Y=59759

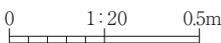


1号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡 炉

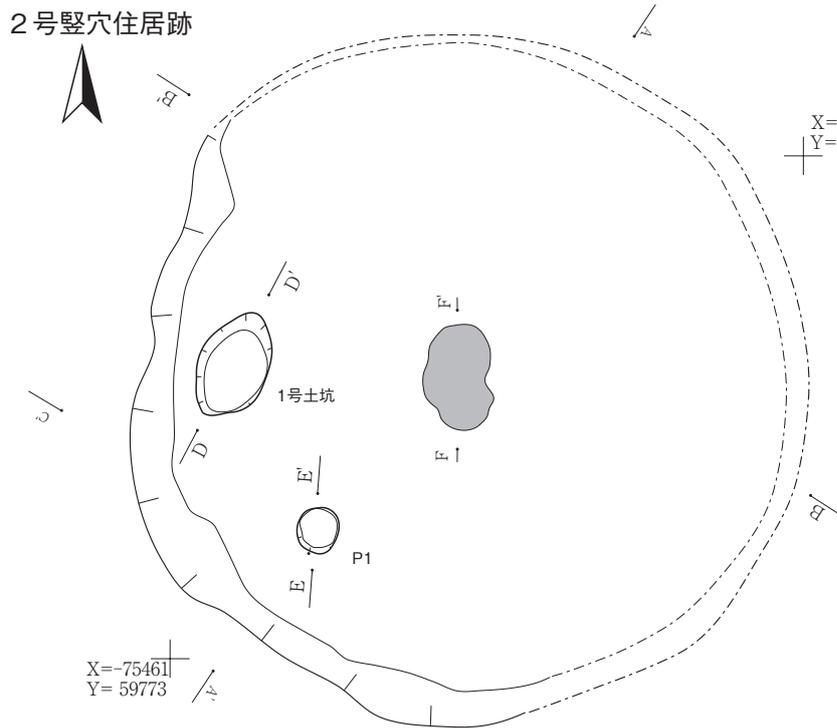
- 1 10YR4/4 褐色シルト しまりやや弱 粘性やや弱 赤褐色焼土ブロック3%, 暗褐色土ブロック10%, 炭化物粒1%含む
- 2 5YR4/8 赤褐色焼土 しまりやや弱 粘性やや弱 混入なし
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性やや疎 炭化物粒1~2%含む



第3図 1号竪穴住居跡

4 検出された遺構

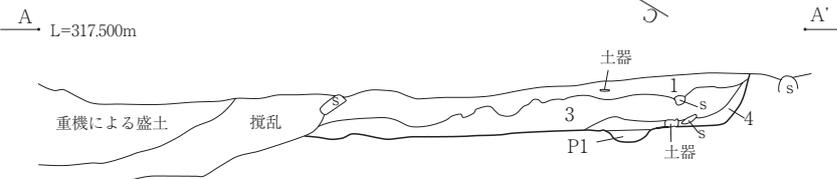
2号竪穴住居跡



2号竪穴住居跡

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト
しまりやや強 粘性やや強
花崗岩粒7%、
黒褐色土ブロック15%、
暗褐色土ブロック3%含む
- 2 7.5YR2/2 オリーブ黒色シルト
しまりやや強 粘性やや強
黒褐色土ブロック7%含む
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト
しまりやや弱 粘性やや強
地山ブロック20~25%、
暗褐色土ブロック25%、
花崗岩粒25~30%含む
- 4 10YR2/1 黒色シルト
しまりやや弱 粘性強
明赤褐色焼土粒3~5%、
黒褐色土ブロック10~15%、
暗褐色土粒7~10%、
炭化物粒2~3%、
花崗岩粒15%含む
- 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト
しまり強 粘性強
黒色土ブロック7%、
木根による地山ブロック7%、
花崗岩粒10%、
明赤褐色焼土粒1~2%含む
- 6 10YR2/1 黒色シルト
しまりやや強 粘性やや弱
暗褐色土ブロック5%含む

A L=317.500m

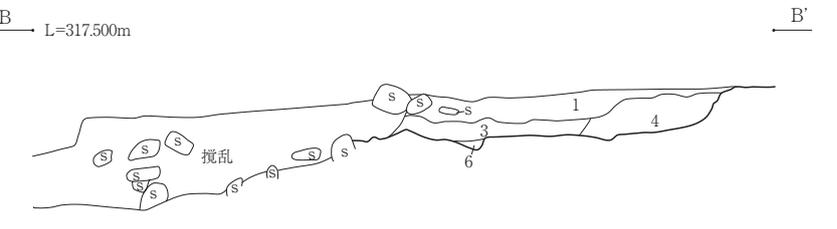


D L=316.700m D'

1号土坑

- 2号竪穴住居跡 1号土坑
- 1 10YR2/3 黒褐色シルト
しまりやや弱 粘性やや弱
褐色土ブロック20%、花崗岩粒10%、
炭化物粒2~5%含む

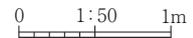
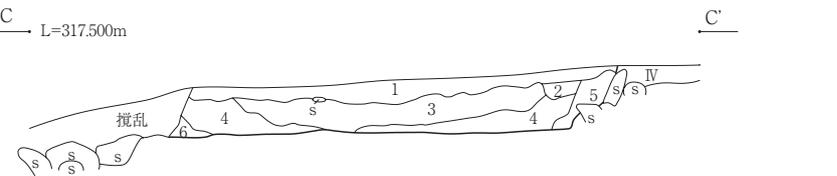
B L=317.500m



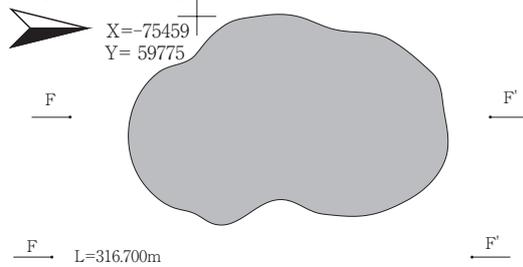
P1 E E' L=316.700m

- 2号竪穴住居跡 P1
- 1 10YR3/4 暗褐色シルト
しまりやや弱 粘性弱
褐色土粒15%、地山ブロック7%、
花崗岩粒15%含む

C L=317.500m



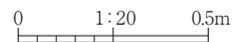
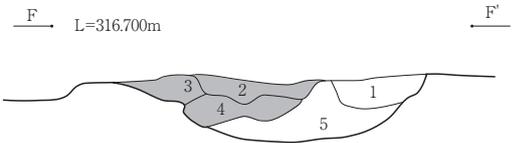
2号竪穴住居跡 炉



2号竪穴住居跡 炉

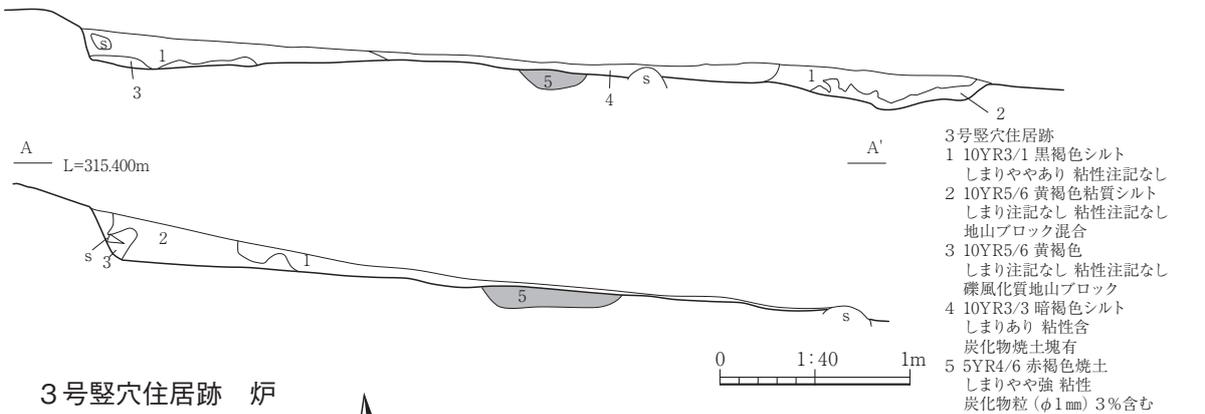
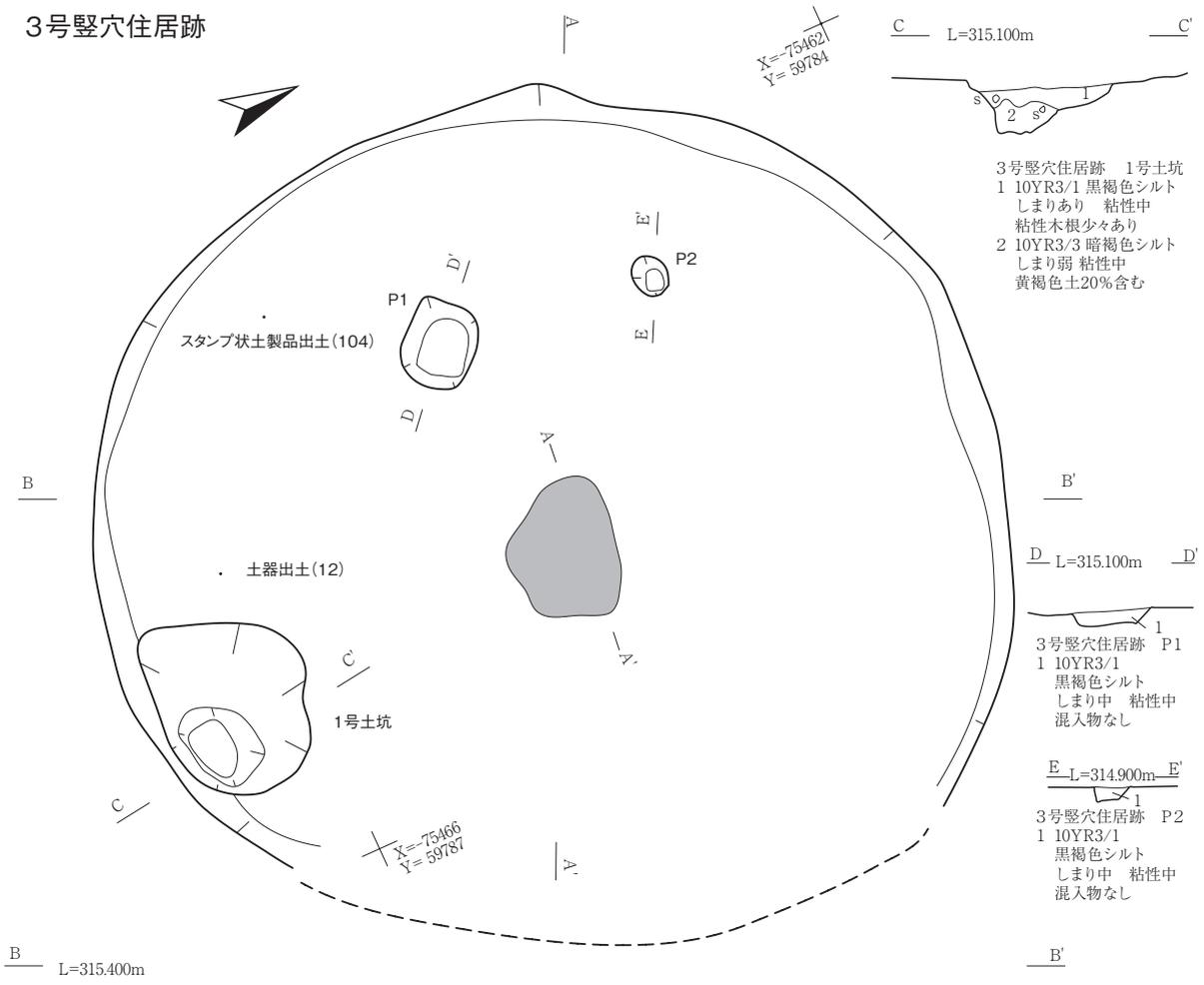
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト しまり弱 粘性やや弱
褐色土粒5~7%、炭化物粒3~5%、花崗岩粒1~2%含む
- 2 10YR4/4 褐色シルト しまり弱 粘性弱
明赤褐色焼土ブロック5~7%含む
- 3 5YR5/6 明赤褐色焼土 しまりやや弱 粘性やや弱 混入なし
- 4 5YR5/8 明赤褐色焼土 しまり弱 粘性弱
褐色土ブロック5~7%、暗褐色土ブロック7~10%含む
- 5 10YR4/4 褐色シルト しまりやや強 粘性やや強
暗褐色土ブロック10~15%、地山ブロック3%、
黒褐色土ブロック3%含む

F L=316.700m F'

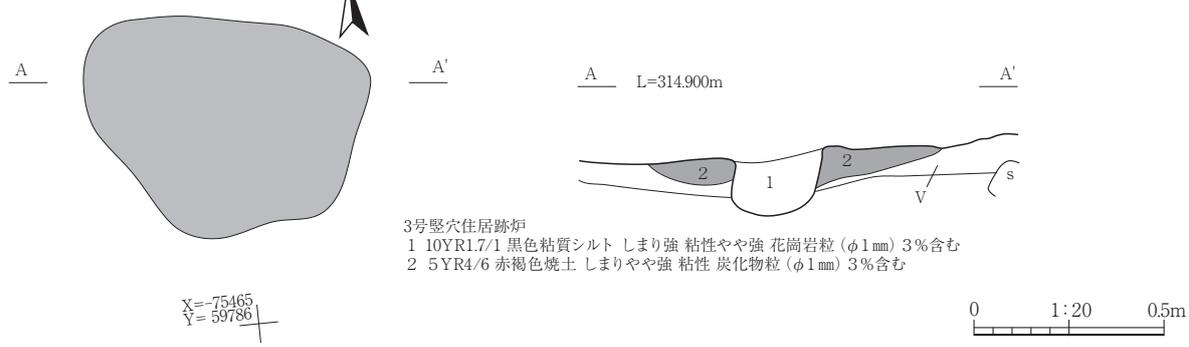


第4図 2号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡

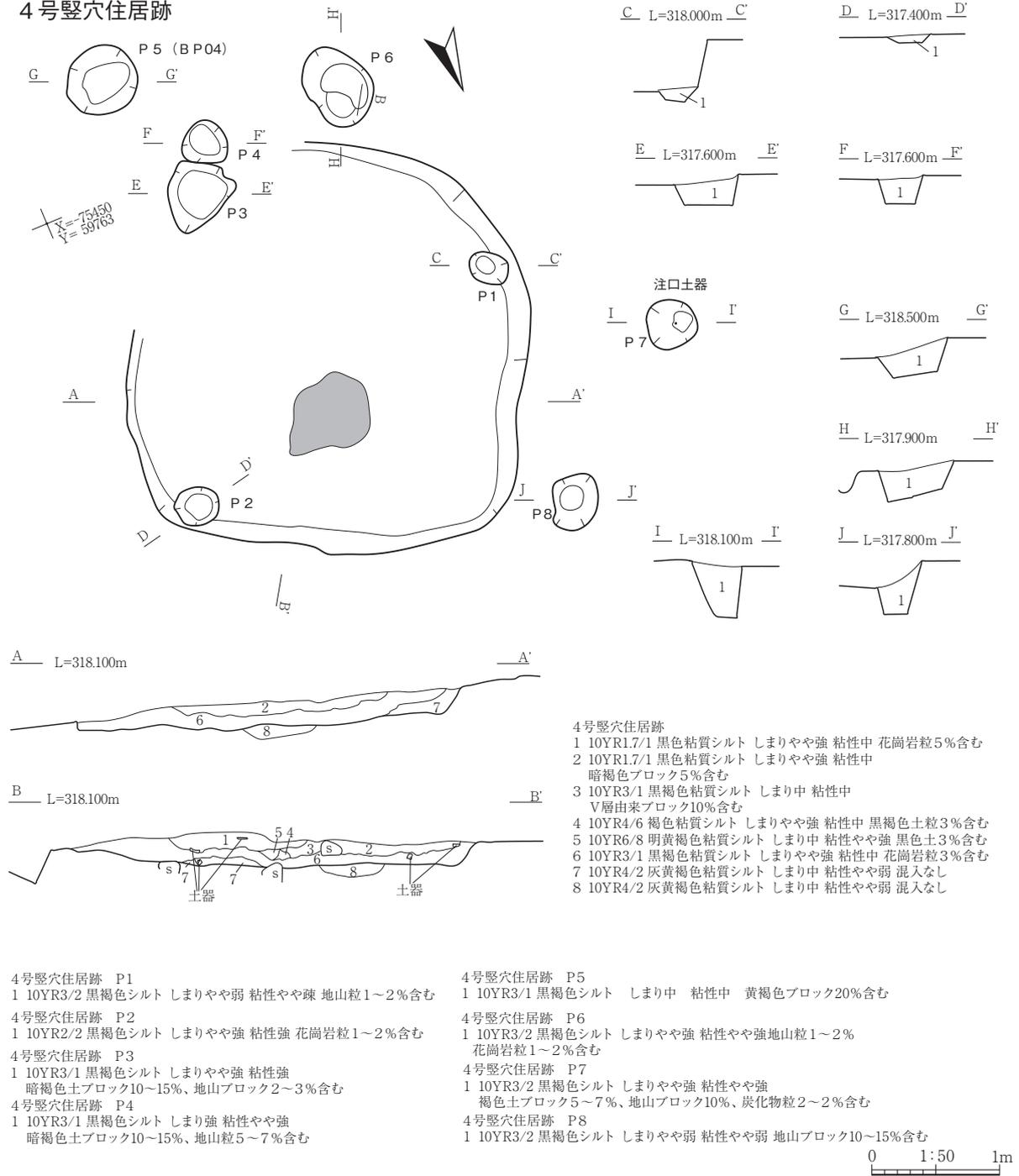


3号竪穴住居跡 炉



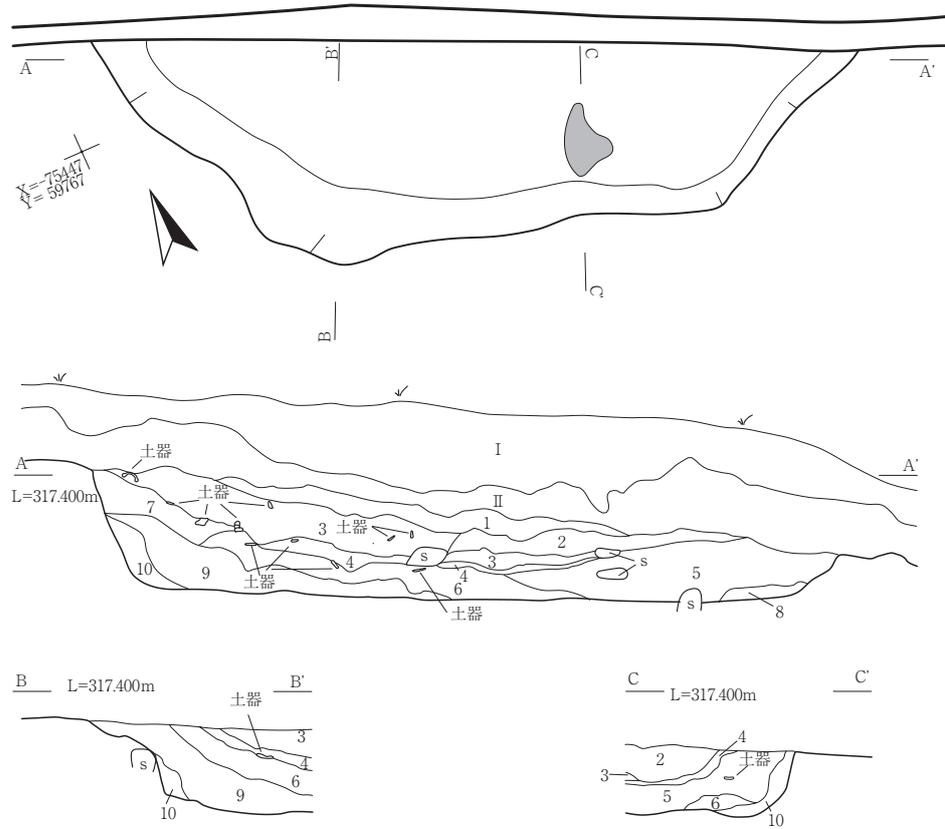
第5図 3号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡



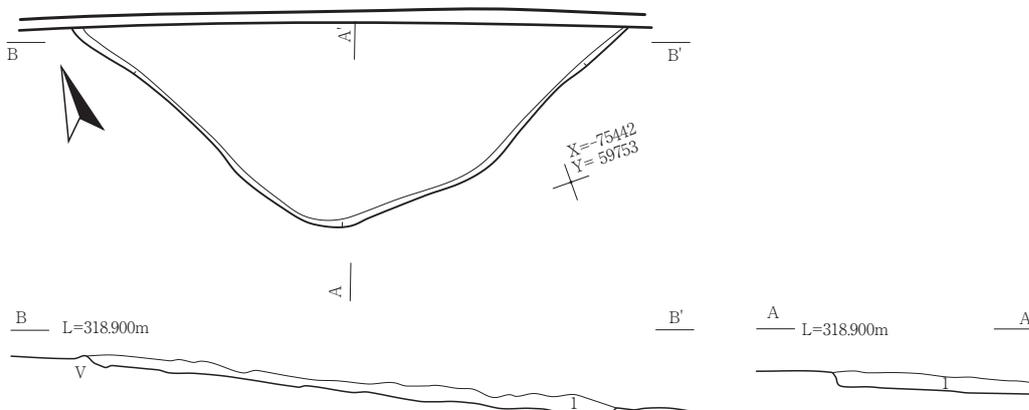
第6図 4号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡

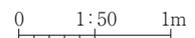


- 5号竪穴住居跡
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやや強 粘性やや強 混入なし
 - 2 10YR2/1 黒褐色シルト しまりやや強 粘性やや弱 黒褐色土ブロック20~25%、花崗岩粒1~2%含む
 - 3 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやや強 粘性やや弱 暗褐色土ブロック20~25%、炭化物粒1~2%、花崗岩粒7~10%含む
 - 4 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやや強 粘性やや弱 赤褐色焼土ブロック15%、炭化物粒3~5%、花崗岩粒10~15%含む
 - 5 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやや弱 粘性やや弱 赤褐色焼土ブロック3~5%、炭化物粒7%、花崗岩粒3~5%含む
 - 6 10YR2/1 黒褐色シルト しまり弱 粘性やや弱 暗褐色土ブロック10%、赤褐色焼土ブロック25~30%、地山ブロック25~30%、炭化物粒25%含む
 - 7 10YR2/1 黒褐色シルト しまりやや弱 粘性やや弱 地山粒1~2%含む
 - 8 10YR1.7/1 黒色シルト しまりやや強 粘性中暗 褐色土ブロック7~10%、地山ブロック1~2%、花崗岩粒1~2%含む
 - 9 10YR2/1 黒褐色シルト しまり弱 粘性やや弱 混入なし
 - 10 10YR2/1 黒褐色シルト しまりやや強 粘性やや弱 暗褐色土ブロック10%、黒褐色土ブロック1~2%、地山ブロック20~30%含む

1号竪穴状遺構

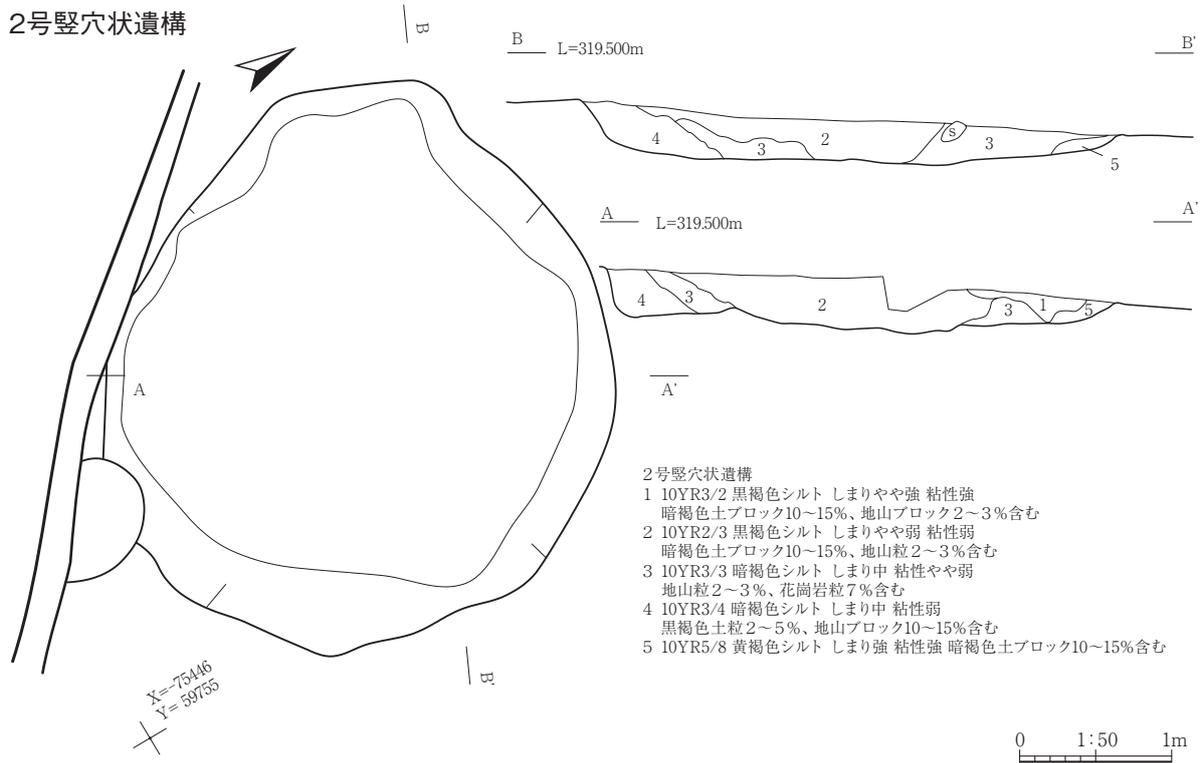


- 1号竪穴状遺構
- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまり中 粘性やや強 V層由来ブロック(φ10cm)10%含む

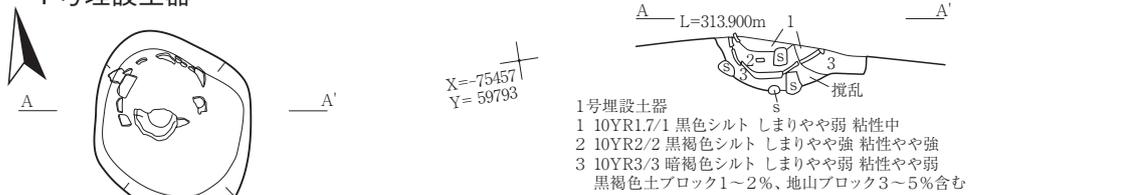


第7図 5号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構

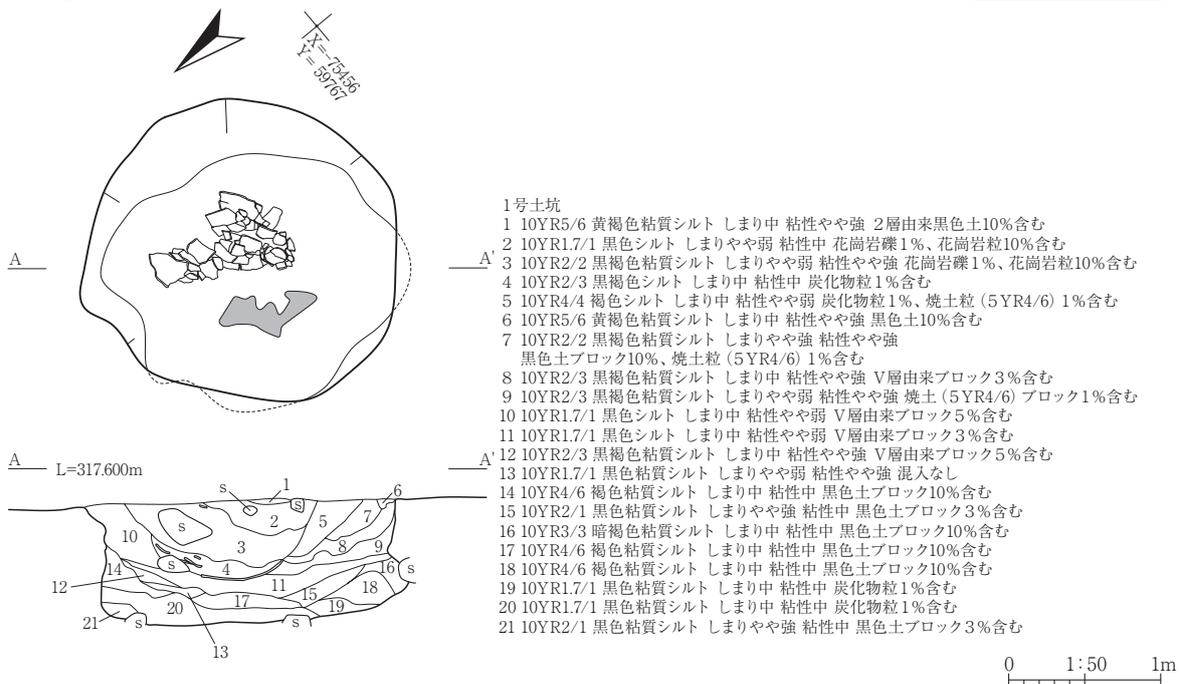
2号竪穴状遺構



1号埋設土器

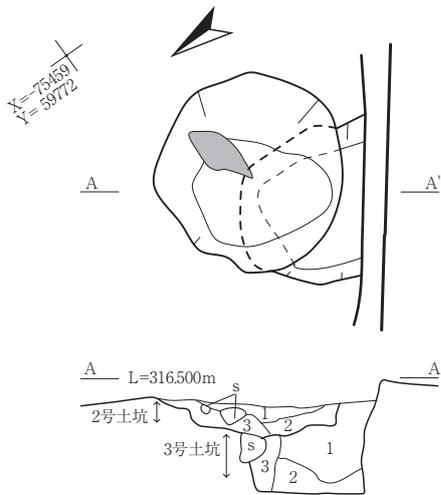


1号土坑



第8図 2号竪穴状遺構、1号埋設土器、1号土坑

2・3号土坑



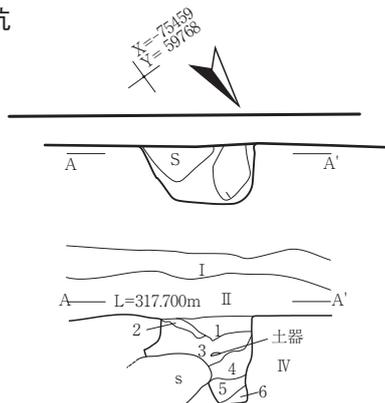
2号土坑

- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト しまり中 粘性中 炭化物粒3%含む
- 2 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまり中 粘性中 灰黄褐色ブロック3%含む
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりやや強 粘性中 V層由来ブロック10%、炭化物5%含む

3号土坑

- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト しまり強 粘性やや弱 暗褐色ブロック5%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまり中 粘性中 V層由来ブロック5%含む
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト しまり中 粘性中 焼土(5YR4/6)ブロック5%含む

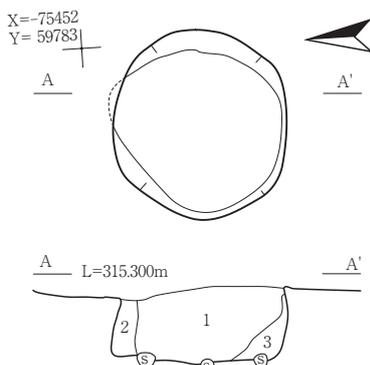
5号土坑



5号土坑

- I 10YR2/1 黒色シルト しまり 粘性 腐植土
- II 暗褐色シルト しまり中 粘性中基本土層
- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト しまりやや弱 粘性中 V層由来ブロック(φ30cm)5%含む
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト しまりやや強 粘性中 V層由来ブロック10%、V層由来土粒5%含む
- 3 10YR2/1 黒色シルト しまりやや強 粘性やや強 炭化物粒3%、土器片含む
- 4 10YR3/3 黒褐色シルト しまりやや強 粘性中 黒色土ブロック5%、V層由来10%含む
- 5 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりやや強 粘性中 花崗岩粒5%含む
- 6 10YR3/3 暗褐色シルト しまりやや強 粘性中 V層由来10%含む

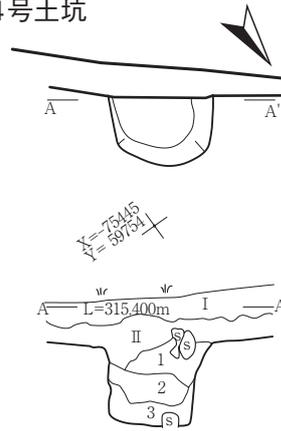
8号土坑



8号土坑

- 1 10YR1.7/1 黒色粘質シルト しまりやや強 粘性中 花崗岩1%、V層由来ブロック1%、V層由来土粒3%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりやや強 粘性中 V層由来ブロック20%含む
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質シルト しまり強 粘性やや強 黒色土5%含む

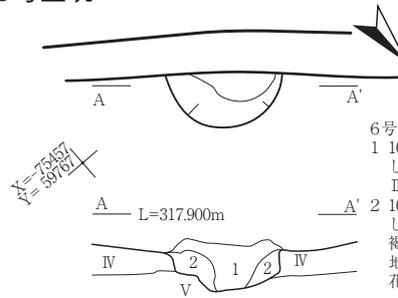
4号土坑



4号土坑

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト しまりやや疎 粘性やや弱 地山土粒7~10%、地山ブロック10%、黒色シルト粒2~3%、花崗岩粒3~5%、炭化物粒3%含む
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト しまりやや疎 粘性やや強 地山土粒2~3%、炭化物粒5~7%、花崗岩粒1%含む
- 3 10YR2/1 黒色シルト しまりやや密 粘性やや強 地山ブロック10~15%、炭化物粒1%含む

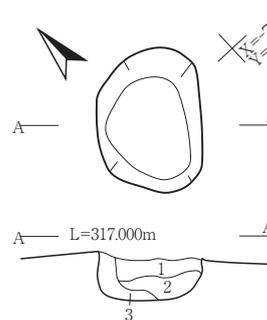
6号土坑



6号土坑

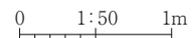
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト しまりやや強 粘性強 II層ブロック5~7%含む
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト しまり中 粘性やや強 褐色土ブロック25~30%、地山粒10%、花崗岩粒10%含む

7号土坑



7号土坑

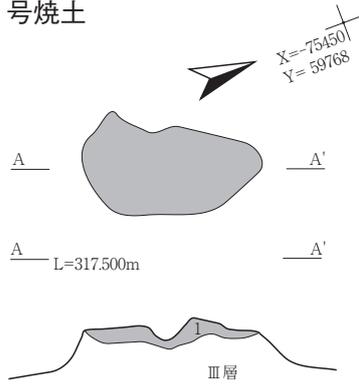
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまり中 粘性やや強 V層由来土粒3%含む
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりやや弱 粘性中 V層由来土粒1%含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりやや強 粘性中 V層由来ブロック30%含む



第9図 2~8号土坑

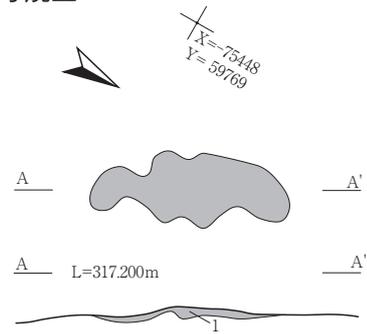
4 検出された遺構

1号焼土



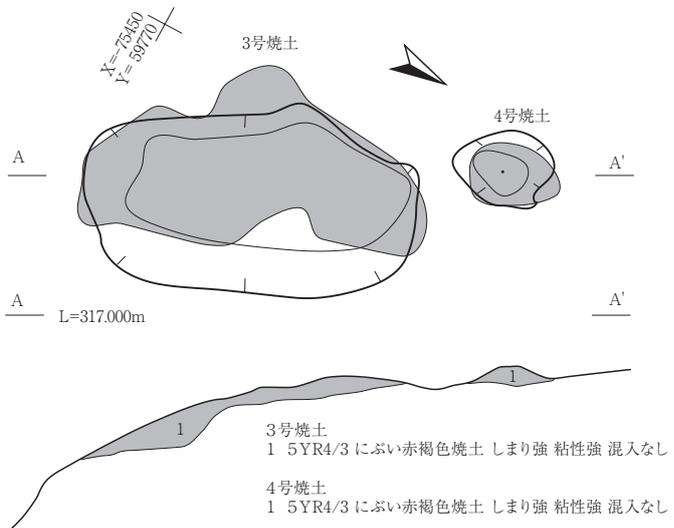
1号焼土
1 5YR4/8 赤褐色焼土 しまり強 粘性やや弱 III層 (10YR1.7/1) ブロック3%含む

2号焼土



2号焼土
1 5YR4/8 赤褐色焼土 しまりやや疎 粘性やや弱 暗褐色ブロック10%、III層ブロック5%含む

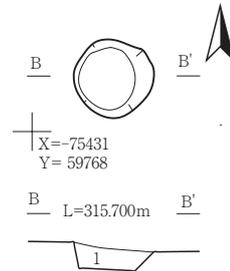
3・4号焼土



3号焼土
1 5YR4/3 におい赤褐色焼土 しまり強 粘性強 混入なし

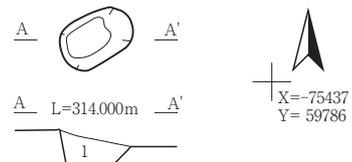
4号焼土
1 5YR4/3 におい赤褐色焼土 しまり強 粘性強 混入なし

A区2号柱穴状土坑



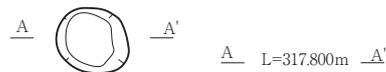
A区2号柱穴状土坑
1 10YR2/3 黒褐色シルト しまり中 粘性やや弱 暗褐色土ブロック5~10%、地山ブロック1~2%、炭化物粒1~2%含む

A区3号柱穴状土坑

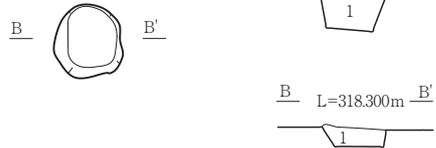


A区3号柱穴状土坑
1 10YR2/3 黒褐色シルト しまりやや強 粘性やや弱 暗褐色土ブロック3~5%、炭化物粒1~2%含む

B区5号柱穴状土坑



B区2号柱穴状土坑



X=-75452
Y=59765

B区3号柱穴状土坑



X=-75453
Y=59768

B区1号柱穴状土坑



C L=318.400m C'

D L=318.300m D'

0 1:50 1m

第10図 1~4号焼土、柱穴状土坑

第1表 竪穴住居跡・竪穴状遺構一覧

No.	遺構名	位置	平面形	規模 (m)	深さ (m)	主軸	床面施設	図版	写真
1	1号竪穴住居跡	IA8~9g	(楕円形)	(3.20) × (2.00)	0.10	N-60° -W	石囲炉	3	3
2	2号竪穴住居跡	IA11~12k~l	不整円形	(4.50) × (4.40)	0.40	N-32° -E	炉、土坑1、柱穴1	4	4
3	3号竪穴住居跡	IA12~13n	不整円形	4.80×<4.00>	0.30	N-24° -E	炉、土坑1、柱穴2	5	6
4	4号竪穴住居跡	IA8~9i	隅丸方形	3.20×3.15	0.20	N-32° -E	炉、柱穴8	6	7
5	5号竪穴住居跡	IA8~9j	(楕円形)	4.80×<1.35>	0.82	N-70° -W	なし	7	9
6	1号竪穴状遺構	IA7e~f	方形	<3.60>×<1.35>	0.10	N-37° -W	なし	7	10
7	2号竪穴状遺構	IA7~8f	隅丸方形	3.85×3.30	0.30	N-62° -W	なし	8	10

第2表 埋設土器・土坑一覧

No.	遺構名	位置	平面形	規模 (m)	深さ (m)	長軸 (主軸)	図版	写真
1	1号埋設土器	IA11p	不整楕円形	0.52×0.41	0.15	N-30° -W	8	11
2	1号土坑	IA10i	不整楕円形	2.30×2.10	0.85	N-81° -W	8	11
3	2号土坑	IA11j	不整楕円形	1.30×1.20	0.25	N-32° -W	9	12
4	3号土坑	IA11j	不明	<1.00>×<0.80>	0.60	N-30° -E	9	12
5	4号土坑	IA8f	楕円形	<0.68>×<0.44>	0.58	N-55° -W	9	12
6	5号土坑	IA11i・11j	不明	<0.70>×<0.40>	0.58	N-50° -W	9	12
7	6号土坑	IA11i	不明	<0.75>×<0.40>	0.30	N-50° -W	9	-
8	7号土坑	IA10j・10k	楕円形	0.90×0.70	0.28	N-50° -E	9	12
9	8号土坑	IA10m	不整円形	1.25×1.20	0.50	N-30° -W	9	12

第3表 焼土遺構一覧

No.	遺構名	位置	平面形	規模 (m)	被熱深度 (cm)	主軸方向	図版	写真
1	1号焼土	IA9j	不整楕円形	0.45×0.25	6	N-20° -E	10	13
2	2号焼土	IA8j	不整楕円形	0.50×0.18	4	N-30° -W	10	13
3	3号焼土	IA9j	不整楕円形	0.88×0.40	10	N-30° -W	10	13
4	4号焼土	IA9j	不整楕円形	0.25×0.15	5	N-3° -W	10	13

第4表 柱穴状土坑一覧

No.	遺構名	位置	平面形	規模 (m)	深さ (m)	図版	写真
1	A区2号柱穴状土坑	IA4j	不整円形	0.50×0.50	0.15	10	14
2	A区3号柱穴状土坑	IA5n	楕円形	0.50×0.30	0.25	10	14
3	B区1号柱穴状土坑	IA10i	不整楕円形	0.55×0.44	0.40	10	14
4	B区2号柱穴状土坑	IA9i	不整楕円形	0.50×0.42	0.12	10	14
5	B区3号柱穴状土坑	IA10ii	不整円形	0.42×0.40	0.30	10	14
6	B区5号柱穴状土坑	IA9i	円形	0.50×0.48	0.35	10	14

()は推定値 < >は残存値

〈形状・規模〉0.25×0.15mの不整円形を呈する。被熱深度は約5cmであり、現地性の焼土であると考えられる。

〈遺物〉出土しなかった。

〈時期〉詳細な所属時期が分かる遺物が出土しなかったため所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代後期に属すると考えられる。

(6) 柱穴状土坑

A区から2個、B区から4個検出した。いずれもV層上面で検出した。A区からは斜面部1個、下部平坦面1個検出し、検出面からの深さは約15～20cmある。B区からは上段から4個検出した。いずれも平面形は円形～楕円形を呈し確認面からの深さは10～40cmである。

(7) 遺物包含層

B区のIA11k・12k・121グリッドに広がるごく狭い範囲の遺物包含層である。斜面地に広がっているため、上部からの流れ込みが主体であると判断できる。B区の北側が近現代の攪乱を受けているため遺物包含層の範囲が北側に広がらなかったと考えられる。

遺物包含層から出土した遺物は縄文時代後期前葉・中葉・後葉、晩期後葉の時期に比定されるものが多く、後期中葉・後葉がやや遺物量が多い。土製品や石器、石製品の出土はほとんどなかった。

5 出土遺物

遺物は、縄文土器7箱(42×32×30cmのコンテナで換算)、石器1箱、その他陶磁器類が出土した。ここでは、遺構内出土と遺構外出土を合わせて扱うこととし、観察から得られた内容を記述する。

(1) 縄文土器

今回の調査で出土した土器(第11～15図、第5～8表、写真図版15～20)は掲載にあたり原則として1:3の縮尺で掲載したが、大型の土器はその限りではない。

縄文土器は後期初頭から後期中葉までが最も多く、早期・前期・中期の土器もわずかに出土する。以下に各時期の特徴を記す。

縄文時代早期

3点掲載した(55・75・76)。すべて小破片である。75・76は遺物包含層から出土し、深鉢の口縁部破片である。粘土粒の貼付とともに貝殻の腹縁圧痕が認められることから縄文時代早期の物見台式であると考えられる。また、55は器面の表裏に縄文を施文し、表裏縄文を施文することから早期末から前期初頭であると考えられる。

縄文時代前期

1点掲載した(58)。いずれも小破片である。58は単軸絡条体を用いていることから縄文時代前期であると考えられる。今回の調査では縄文時代前期前葉の遺構は確認できなかったため周辺から流れ込んできたと考えられる。

縄文時代中期～後期前葉

3点掲載した(21・43・54)。21は4号竪穴住居跡の堆積土から出土した口縁部破片である。胎土に小石等の混入物が含まれている。平縁で、複数の楕円形状の文様を描いている。43は8号土坑から出土した深鉢の胴部破片である。54は遺構外から出土した深鉢の胴部破片である。いずれも胎土に繊維を含み、器面には網目状撚糸文を施文する。これらは縄文時代中期末から後期前葉と考えられる。

縄文時代後期前葉

3点掲載した(11・49・71)。11は2号竪穴住居跡から出土した深鉢の底部である。底部に木葉痕が確認できる。49・71はいずれも遺構外から出土した。49は深鉢の胴部破片で胎土に混入物を少量含んでいる。器面には、縄文を施文後に沈線で渦巻文を描いている。71は浅鉢の破片である。縄文は施文されず、沈線で弧状を描いている。これらは縄文時代後期前葉と考えられる。

縄文時代後期前葉～中葉

2点掲載した(27・53)。27は5号竪穴住居跡から出土した深鉢の口縁部から胴部破片である。器面には縄文が施文されている。53は遺構外から出土した深鉢の底部である。器面には、文様が施文されおらず無文である。胎土には雲母や繊維を少量含んでいる。これらは、縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

縄文時代後期中葉

7点掲載した(12・17・18・28・35・44・48)。12は3号竪穴住居跡から出土した小型深鉢である。欠損はなく完形である。口縁は平縁である。胴部は羽状縄文を施文し、沈線で区画後磨消が行われている。17・18は4号竪穴住居跡から出土した破片である。17は壺の頸部から胴上部である。肩が張り出す形状である。器面には、羽状縄文を施文し、沈線で渦巻文を描き、区画外を磨消している。また、渦巻きの中心部には粘土粒を貼付けている。18は深鉢である。胴上部がやや膨らむ形状で、口縁はやや垂直に立ち上がり、口唇部がやや肥厚する。口唇はやや丸みを帯び、縄文が施文される。頸部は無文である。胴部は、羽状縄文を施文し、沈線で区画し、区画外を磨消している。口縁と頸部の境界は沈線で区画されている。28・35は5号竪穴住居跡から出土した破片である。28は三角状突起である。胎土には雲母が微量含まれている。器面には沈線で三角形を描き、細かい刺突が施されている。35は浅鉢の口縁部破片である。口唇は丸みを帯びる。器面には、縄文が施文される。内面には器面と同様に縄文を施文し、沈線が弧状に描かれる。区画外は無文である。44は1号埋設土器から出土した深鉢で、胴部下半から底部まで出土した。胎土中に混入物を少量含み、器面には撚糸文が施文されている。内面には、輪積み痕と煤の付着が確認できた。48は遺構外から出土した深鉢の口縁部破片である。口縁は平縁である。口縁には、横方向の沈線を2条施文後、刺突している。これらは、後期中葉と考えられる。

縄文時代後期中葉～後葉

5点掲載した(13・19・20・23・73)。13は3号竪穴住居跡から出土した。深鉢の口縁部から胴部の破片である。胴部がやや張り出し、口縁の末端が細くなる形状である。口縁は無文で、頸部には横方向の櫛書文、胴部には弧状の櫛書文が施文される。19は4号竪穴住居跡から出土した深鉢の考えられる器種の口縁部破片である。外傾する口縁で、平縁である。口縁には、粘土の貼り付けが行われてい

る。また、横方向に2条沈線が施文される。

縄文時代後期

明確な所属時期は不明であるが、胎土の特徴などから縄文時代後期に属すると考えられる破片を一括した。主に竪穴住居跡などの遺構内出土である。無文や地文のみが施文されている破片が多い。器種は深鉢・浅鉢・注口・台付きが見つまっている。36は5号竪穴住居跡からの出土であるが、浅鉢の口縁部破片で内外面ともに赤彩が確認できる。

縄文時代晩期後葉

1点掲載した(81)。遺構外出土の台付である。坏部分は欠損しているが、脚部は下部に施文が行われており、晩期後葉の大洞A式であると考えられる。また、脚部に赤彩の痕跡が確認された。

不明

遺構外から出土した深鉢底部である。器面は無文で底部には笹の葉状の痕跡が確認できた。文様などが施文されていないため所属時期は不明である。

観察の結果、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器が確認できた。早期・前期・中期・晩期は出土量が少なく、主体となるのは出土量の多い後期中葉であると考えられる。

また、後期に属する土器片の胎土には雲母が確認できる破片が多く、丁寧に文様が施文されている土器片ほど雲母が多く見受けられる。

埋設土器や土器内部に土がそのまま残っている注口・深鉢は内部に炭化物や獣骨が含まれている可能性を考え、土を水洗し炭化物などを採したが確認できなかった。

(2)土製品

土製品は、ミニチュア土器8点、土偶10点、土鈴1点、円盤状土製品2点、スタンプ状土製品1点を掲載した。

ミニチュア土器(第16図、写真図版20)

10点掲載した(84~93)。文様が施されるものは3点のみで所属時期は縄文時代後期であると考えられる。他の7点は外面が未調整の素面である。特徴的文様を持たないことから詳細な時期は特定できないが、出土地・層位・共伴土器から縄文時代後期と推定される。

土偶(第16図、写真図版20)

9点掲載した(94~102)。94は縄文時代後期中葉であると推定される。それ以外は後期であると推定される。完形品はなく、すべて欠損品である。細かい刺突が施されるもの、乳房を持つものなどの特徴から後期中葉に所属すると考えられる。

94は土偶頭部である。三角形の頭部を持ち沈線が施される。頭部と顔部との境界には隆線とLRの施文が施される。両目は粘土貼付後に縄文を施文している。顔部の鼻から口にかけては、目と同様に隆線が貼付されていたと考えられるが、欠損しており、貼付の痕跡が確認できる。また、両耳と考えられる位置には穿孔が施されている。穿孔は両耳と頭部に確認できるが、いずれも焼成前に穿孔し

たものである。わずかに頸部が確認できるが、そこに円形状の刺突が確認できる。この刺突は九重沢Ⅲ遺跡から出土した土偶体部数点に確認でき、後期中葉ではないかと考えられる。

98は土偶の体部である。残存していたのは胸部下から脚部までである。胸部がわずかに残存しており、やや膨らむことから乳房を表現していたと考えられる。また、腹部にあたる部分が膨らみ、円形の瘤状の貼付と胸部下から中心を通るように粘土紐の貼付をしている。背面はほぼまっすぐで、臀部が張り出すような形状はしていない。また脚部はまっすぐ伸びるのではないかと考えられる。縄文時代後期のものと考えられる。

100は土偶頭部である。やや円形に広がる脚部で、円形の刺突が列状に施されている。頭頂にあたる部分は円形に広がる形状である。

不明土製品(第16図、写真図版20)

1点掲載した(103)。下部がやや広い十字型をなしており、一部が欠損してある。表面には中央に粘土貼付(またはつまみだし?)し、その張り出した部分を貫通するように穿孔を施している。また、裏面には直線的な沈線を横や斜方向に施文している。土偶の一種とも考えられるが、今回は不明土製品として報告した。所属時期は不明であるが、遺跡の時期などから縄文時代後期に属するものと考えられる。

スタンプ状土製品(第16図、写真図版20)

1点掲載した(104)。つまみの一部とスタンプの一部が欠損している。つまみは穿孔が施されている。スタンプは楕円形状で直線的な沈線と弧状をなす沈線で模様を描かれている。所属時期は不明であるが、遺跡の時期などから縄文時代後期に属するものと考えられる。

土錘(第16図、写真図版20)

2点掲載した(105・107)。円形もしくは楕円形状を呈し、長径もしくは短径に沿うように溝を刻んでいるものである。107は5号竪穴住居跡の埋土上位から出土し、中央部に穿孔を施している。105は遺構外からの出土であるが、大きさはほぼ同じである。105は長径・短径に沿うように刻みが施されている。帰属時期は107が5号竪穴住居跡の埋土上位で見つかっていることから、5号竪穴住居跡以降に使用されたものと考えられる。また、105は遺構外出土であるため帰属時期は不明である。

土鈴(第16図、写真図版20)

1点掲載した(106)。やや横に長い円形を呈する。密閉されており、表面には縄文と沈線を部分的に施している。振るとカラカラと音がする。内部はレントゲン撮影の結果、空洞になっていることが確認できたが、小礫や種子の存在は確認できなかった。所属時期は不明であるが、遺跡の時期から縄文時代後期に属するものと考えられる。岩手県内において縄文時代の土鈴の出土は、盛岡市萩内遺跡(後期中葉)出土2点と陸前高田市瀬沢貝塚(後期前葉)出土の3点が挙げられる。瀬沢貝塚出土の土鈴は壺形をしており、内部に土製の球が入っていることが確認されている。また、萩内遺跡からの土鈴2点は円形状を呈し、うち1点は小玉6個が内部に収められていることが確認されている。形態的に萩内遺跡出土の土鈴と非常によく似ているが、大きさに差異が認められる。所属時期はほぼ同じである。

円盤状土製品(第16図、写真図版20)

2点掲載した(108・109)。土器片を再利用し、周縁に打ち欠きや研磨を施し円形に整形したもの、およびこれに類するものである。いずれも地文が施文されている土器片を利用しており、詳細な所属時期は不明であるが、遺跡の年代から縄文時代中期中葉から後期中葉の間であると考えられる。

(3) 石 器

石鏃(第17図、写真図版21)

扁平で鋭利な左右対称の尖頭部が作出された小型の剥片石器で、18点掲載した(110~127)。茎部の有無で大きく2群に細分した。

無茎の石鏃は7点(120~127)である。基部に抉りを有するもの、わずかに有するもの、抉りを有さず基部にやや丸みを帯びるものの3つに細分できる。

有茎の石鏃は10点である。有茎の石鏃は幅が1.5cm弱の細身のものと1.5cm以上のものに大きく分かれる。

1点は基部部分が欠損しているため有茎か無茎かの判断が難しい。石材はほとんどが北上山地産の頁岩で、116のみ北上山地産のメノウである。

石匙(第17図、写真図版21)

一端に摘み状の突起を持ち、側縁の一部に刃部を有するものを一括した。摘みの付き方で、縦形、横形、斜方の3つに分類した。

縦形は3点掲載した(128・129・131)。縦形の中で128・129は台形状を呈する。131は縦形の中で先端が細くなる三角形を呈する。129は2号竪穴状遺構より出土しており、端部が欠損している。石材はいずれも北上山地産の頁岩である。128は縁辺に微細剥離が集中している。131は128・129と比較しても長さ・幅とも大きく、厚みもある。

横形は1点のみで(132)、摘み部分の先端が欠損している。横形の中で柳葉状に似てやや細身で先端が尖頭状を呈するものである。石材は北上山地産の頁岩である。

斜形も1点のみで(130)、形状は三角形を呈する。石材は北上山地産の頁岩である。遺構外出土で、明確な所属時期は不明であるが、遺跡の所属時期から縄文時代後期に所属すると考えられる。

石錐(第17図、写真図版21)

縁辺の端部に両側縁から剥離を施し先鋭な刃部を作出し、主に対象物に穿孔を施すことを目的に用いられたと思われる石器である。2点掲載した(133・134)。石材はいずれも北上山地産の頁岩である。剥片の両側縁から微細剥離を施し先鋭な刃部を作出したもので、133の基部にはわずかではあるがアスファルトが付着しており、柄を装着して使用したものと考えられる。

スクレイパー類(第17図、写真図版21)

石鏃・石槍・尖頭器・石錐・石筥・石匙などには該当しないもので、意図した刃部を作出させると考えられるものを一括した。出土数が少ないため、主要な刃部として機能する部位と面数で2つに区分した。

1側縁に刃部が形成されるものは137で端部が欠損している。石材は北上山地産のメノウである。3側縁に刃部が形成されるものは135・136である。136は端部が欠損しているが、3側縁以上の刃部

が確認できる。135も同様に3側縁以上の刃部が確認できる。石材は136が北上山地産の珪質頁岩、135は同じく北上山地産の頁岩である。帰属時期は明確には不明であるが、遺跡の帰属時期である縄文時代後期に属すると考えられる。

剥片(第17図、写真図版21)

剥片剥離作業において産出された石器製作に不適な剥片や縁辺部などに微細な剥離痕が確認されるが、明確な刃部を形成していない剥片一括した。

明確な刃部形成を行っていないが、縁辺に剥離が施される剥片は4点掲載した(139・142～144)。いずれも遺構外でⅣ層の出土である。石材は139が北上山地産のメノウであるが、他の3点は同じく北上山地産の頁岩である。139は表裏に剥離が施されているが、明確な刃部は確認できない。

石器製作に不適な剥片と思われるものを3点掲載した(138・140・141)。138・141の石材は北上山地産の珪質頁岩である。140は北上山地産のメノウである。これらの石器は裏面には自然面が確認できることから、これらの剥片は、原石から剥離した状態の剥片であると考えられる。

磨製石斧・打製石斧(第17・18図、写真図版22)

斧状の形態の石器である。未成品を含め7点出土し、全点掲載した。なお、打ち欠きや敲打調整(ペッキング)等により、全体の形状が斧状に仕上げられているものは、研磨される前段階の未成品と捉え磨製石斧とした。剥離によって斧状の形態に整えられて石器を打製石斧と掲載した。

未成品およびミニチュア磨製石斧以外の4点はいずれも刃部が欠損し、頭部が残存している。研磨の痕跡が確認できるため、完成後に欠損したものと考えられる。4号竪穴住居跡より出土した147は他の磨製石斧と比較して、全体的に研磨痕が確認できるものの、厚みがあり断面形状が三角形に近いことから磨製石斧以外の可能性も考えられる。石材は145が北上山地産のヒン岩、147が早池峰山周辺の蛇紋岩、148が北上山地産の頁岩、146が北上山地産の砂岩である。

150は磨製石斧の未成品である。両面とも敲打調整の痕跡、打ち欠きの剥離痕、礫本来の自然面が確認でき、研磨の痕跡が確認できないことから、研磨に至る前に破棄されたものであると考えられる。石材は北上山地産の砂岩である。149はミニチュアの磨製石斧である。石材は早池峰周辺の蛇紋岩である。4号竪穴住居跡より出土し、両面に欠けがあるが、ほぼ完成品である。研磨痕が全面で見られ、刃部もしっかり整えられている。他の出土した磨製石斧の厚みが1.3～2.7cmであるのに対して0.6cmと約半分である。また、長さ5.0cm、幅2.4cmであり、他の磨製石斧の約半分の大きさである。祭祀的な意味合いを持つと考えられる。151は打製石斧である。北上山地産の頁岩製で自然面を残しつつ、両側縁を剥離により打ち欠いており、斧状の形態に整えている。

石錘(第18図、写真図版22)

側面に抉りのあるものを1点掲載した(154)。片側の抉りを欠損しているが、残存する抉りの深さは2mmである。また裏面に研磨痕跡も見受けられる。石材は北上山地産のホルンフェルスである。

敲磨石(第18図、写真図版22)

研磨痕や敲打痕の観察される礫石器である。6点掲載した(152・156・157・158・159・161)。これらは研磨痕跡と敲打痕跡が両方確認できるもの(149・156・158)、研磨痕跡のみ確認できるもの(161・157)、敲打痕跡のみ確認できるもの(152)の3つに区分することができる。研磨痕跡と敲打痕跡が確

認できるものは円形状を呈するものと断面が三角形の棒状に分けられる。円形のものはいずれの表面に研磨と敲打を行っている。また、棒状は端部を敲打に、広い面を研磨に利用している。石材は多様で、いずれも北上山地産ではあるが、159はデイサイト、156は斑岩、158はホルンフェルスである。研磨痕跡のみ確認できるものも円形状と方形に分けられ、両面に研磨が及んでいることが確認できる。石材は161が花崗閃緑岩、157がホルンフェルスでいずれも北上山地産である。敲打痕跡のみ確認できるのは152で、円形を呈し端部に敲打痕跡が確認できる。石材は北上山地産の凝灰岩である。5号竪穴住居跡より出土しており、遺構の年代から縄文時代後期と考えられる。

凹石(第18図、写真図版22)

明瞭な凹部が確認できる1点を掲載した(163)。表側は石器の中心軸上で中央よりやや下に凹部が形成される。裏面は中心軸からやや右下で凹部が形成される。凹部の深さは2～5mmである。石材は北上山地産の砂岩である。

礫器(第18図、写真図版22)

礫石器の中で上記の各器種に帰属できなかった礫石器、あるいは石器の可能性を有するが形態的な特徴や各種使用痕は明瞭に確認できなかったものを1点掲載した(162)。石材は北上山地産の安山岩で、端部は欠損しているが、表裏に剥離の痕跡が確認できる。平面形状は台形状を呈すると考えられ、石斧の未成品の可能性も考えられる。

6 まとめ

今回実施した九重沢Ⅲ遺跡の発掘調査の結果、縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物が発見され、縄文時代に集落が営まれていたことを確認した。

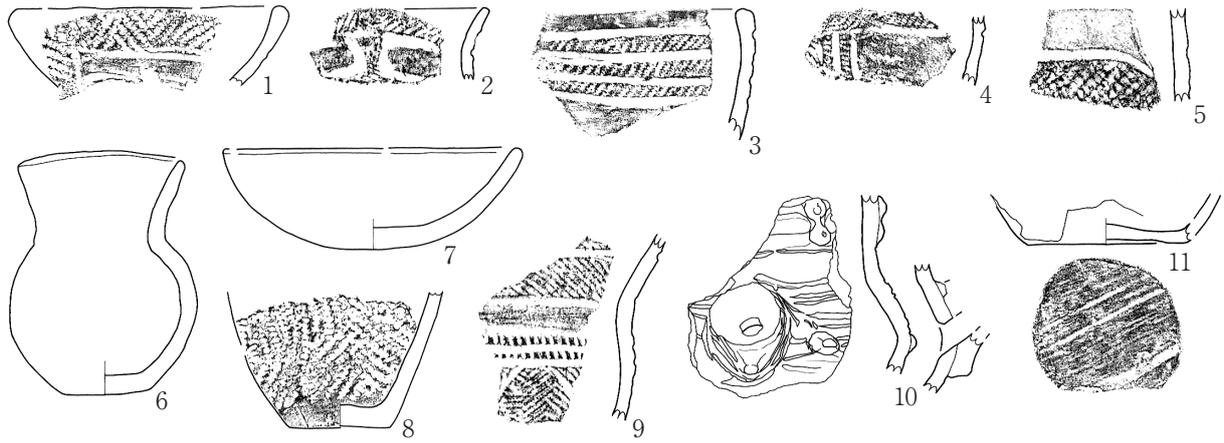
九重沢Ⅲ遺跡は近くに沢が流れる南東向きの斜面に位置している。縄文時代における遺構の空間占地については、A区では、柱穴状土坑2個のみの確認となった。全体的に標高が低く、上部が削平された可能性が考えられる。竪穴住居跡5棟、竪穴状遺構2棟、埋設土器1基、土坑8基が確認できたB区では縄文時代中期の遺構は斜面下の標高の低い位置に確認でき、後期の遺構は斜面下の3号竪穴住居跡以外は標高の高い斜面上の平坦地と斜面地を利用していることが分かった。しかし、斜面下では現代の攪乱が数多く見つかると、攪乱の掘削深度も大きく削平されてしまった可能性は否定できない。

B区では先述したように、遺構は上部平坦面の利用が中心であるが、斜面下も利用している。斜面下は基盤層に含まれる巨礫が露出しており、さらに近現代の攪乱も受けている。斜面下の竪穴住居跡は礫が床面から露出している状態であった。このように生活にはやや不向きな地域であっても竪穴住居を構築していることが窺える。この巨大礫を含む基盤層は斜面上の平坦面でも検出面から約50cm掘り下げると確認できる。土坑の底面に礫が露出する土坑が確認されたことから、土坑を掘る際に礫が露出し、巨大な礫であるためか掘りだすことはせずそのまま利用していることが明らかになった。これは土坑を作ることの出来る範囲がある程度定まっていた可能性が考えられる。

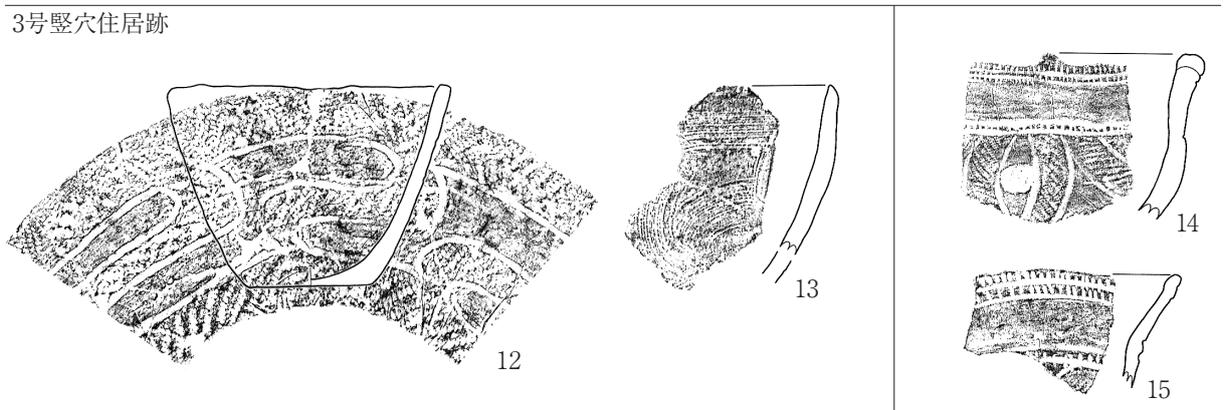
更に1号土坑・5号竪穴住居などで堆積土中に焼土が検出された。焼土は被熱を受け赤変しており、細かなブロック状ではなかったため、現地で焼成したと考えられる。堆積土中位での検出であるため、一度廃棄され、自然埋没し窪地になっていた場所で火を焚いたということが考えられる。

出土遺物からは、縄文時代早期から後期後葉までの時期幅の土器が出土しているが、遺構に伴う遺

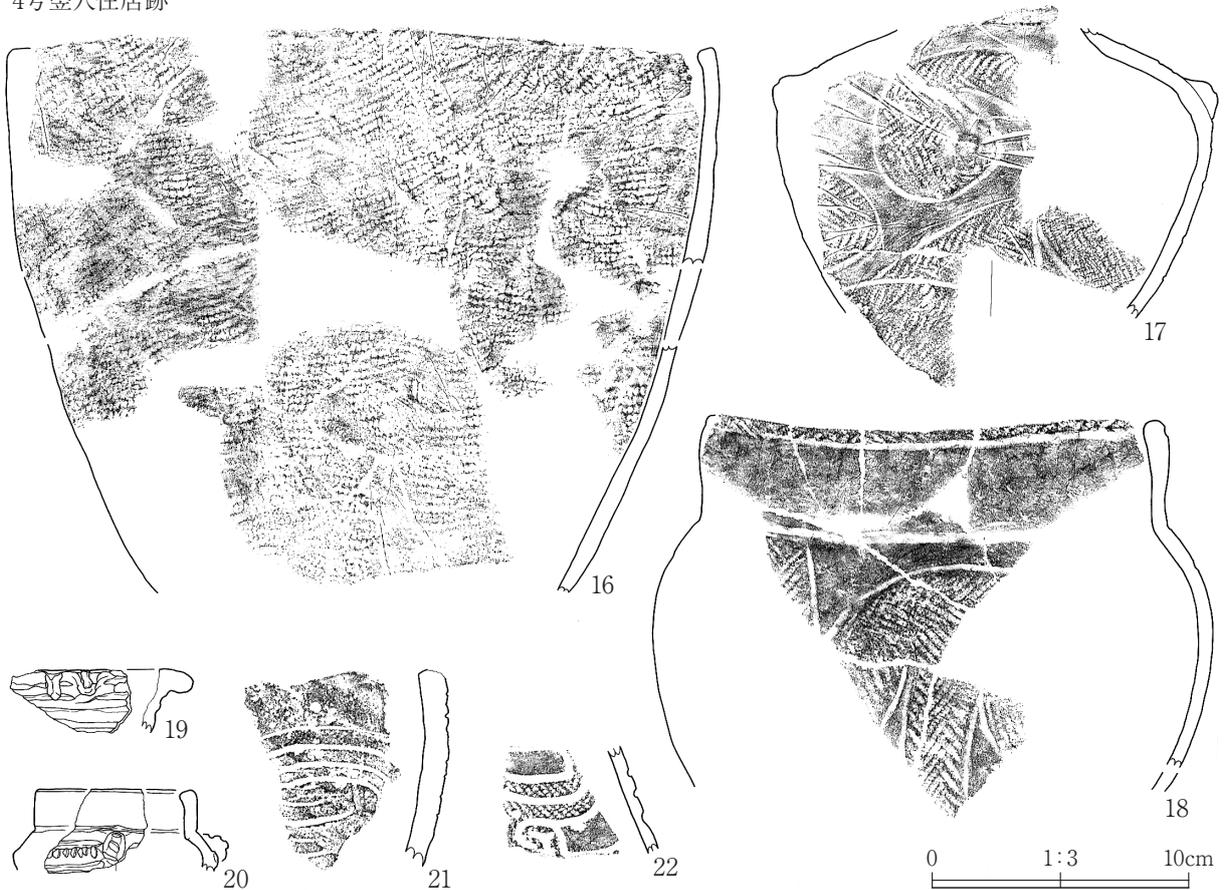
2号竖穴住居跡



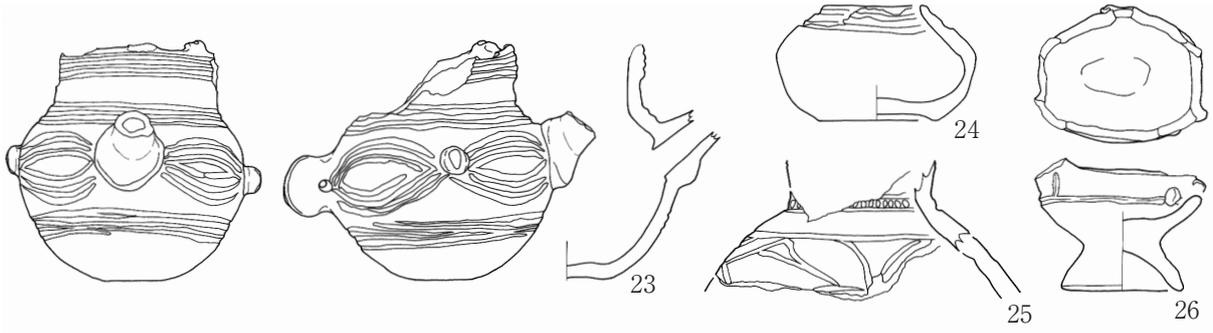
3号竖穴住居跡



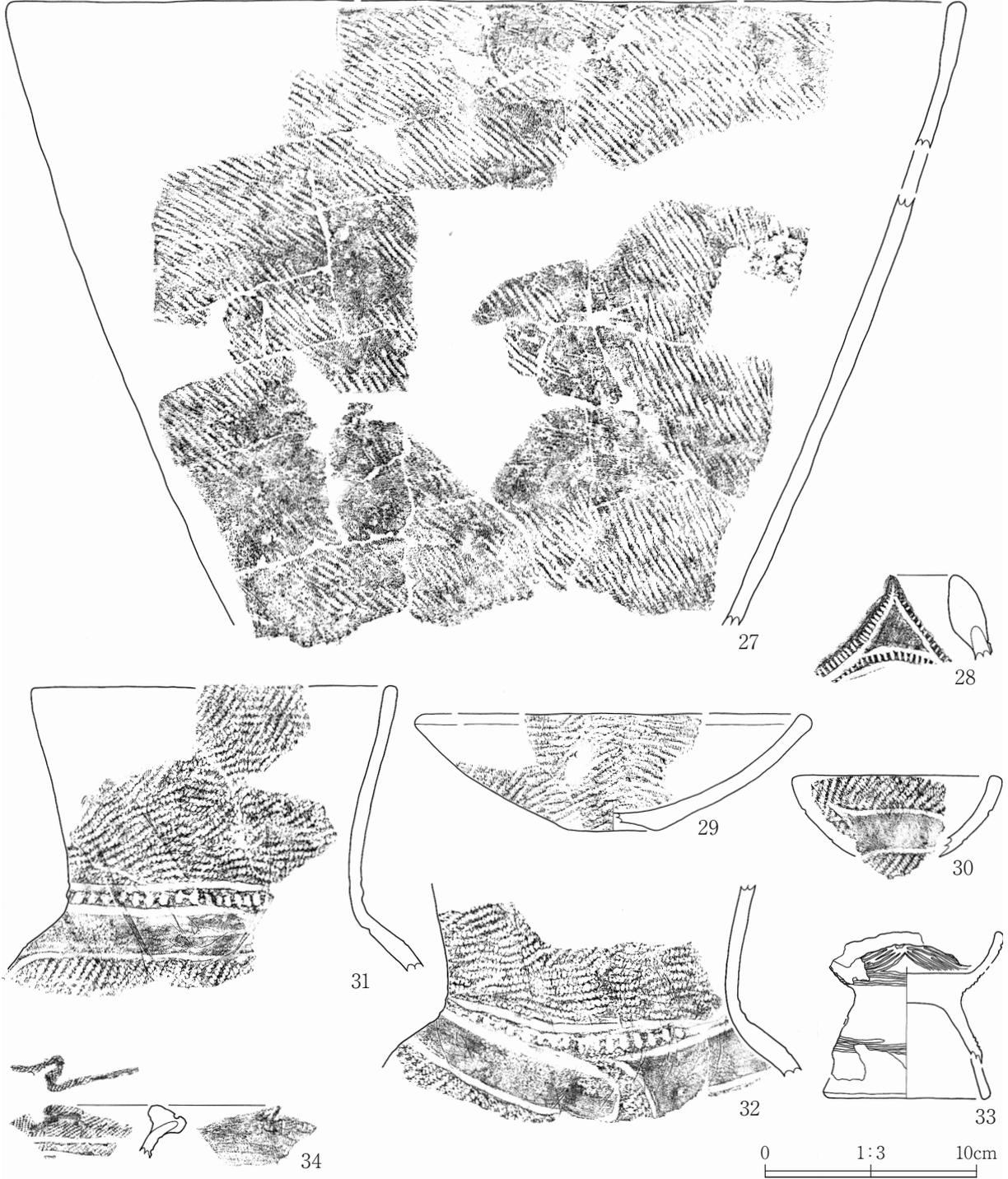
4号竖穴住居跡



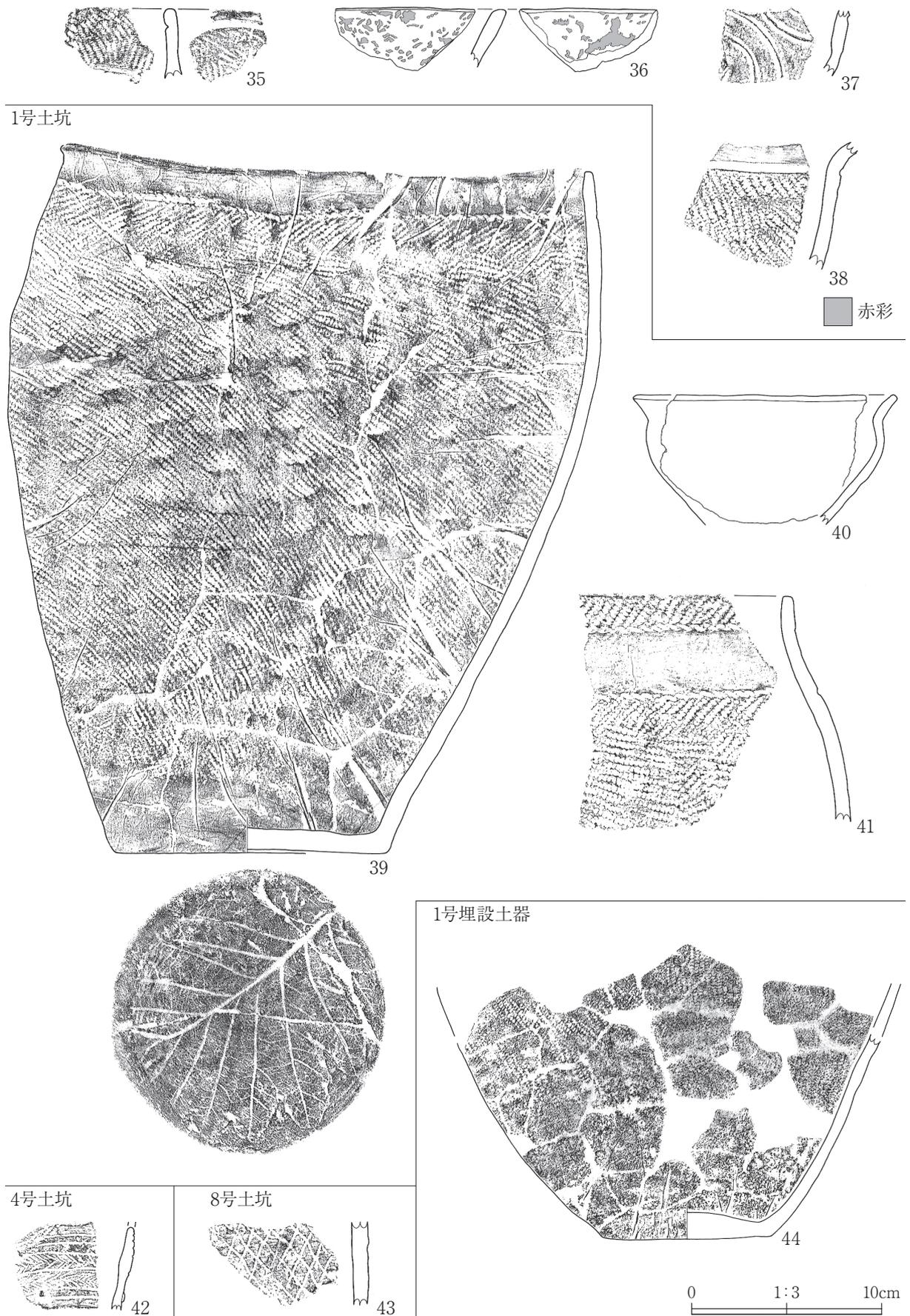
第11図 遺構内出土遺物(1)



5号竖穴住居跡

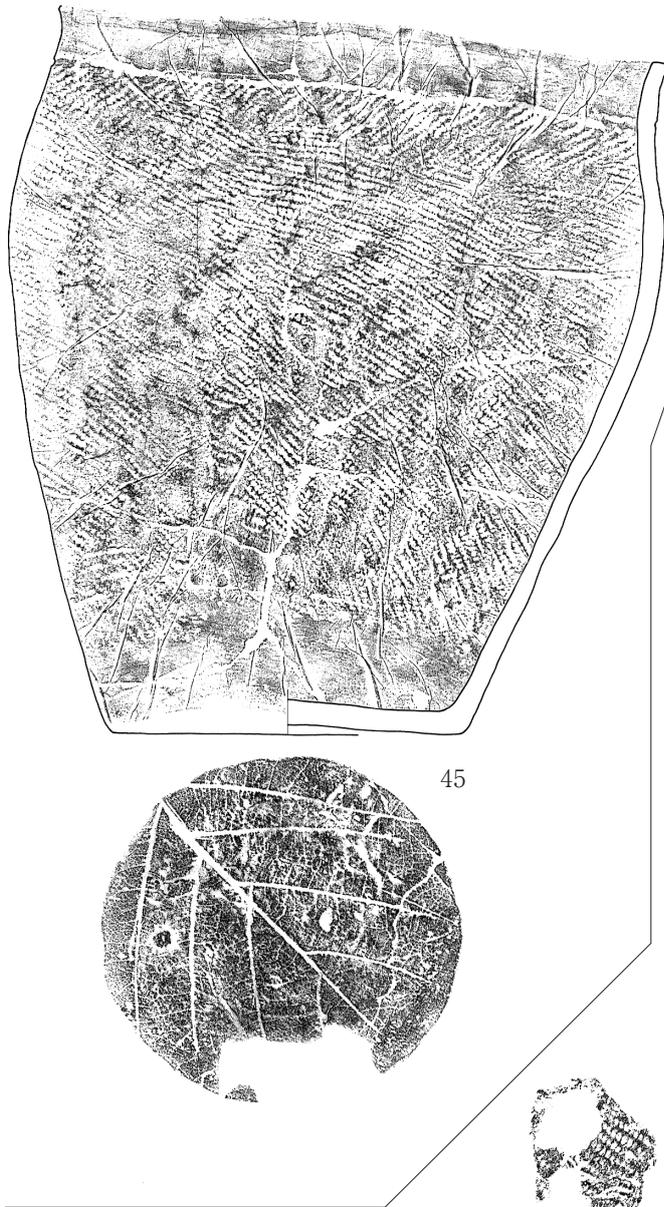


第12図 遺構内出土遺物(2)

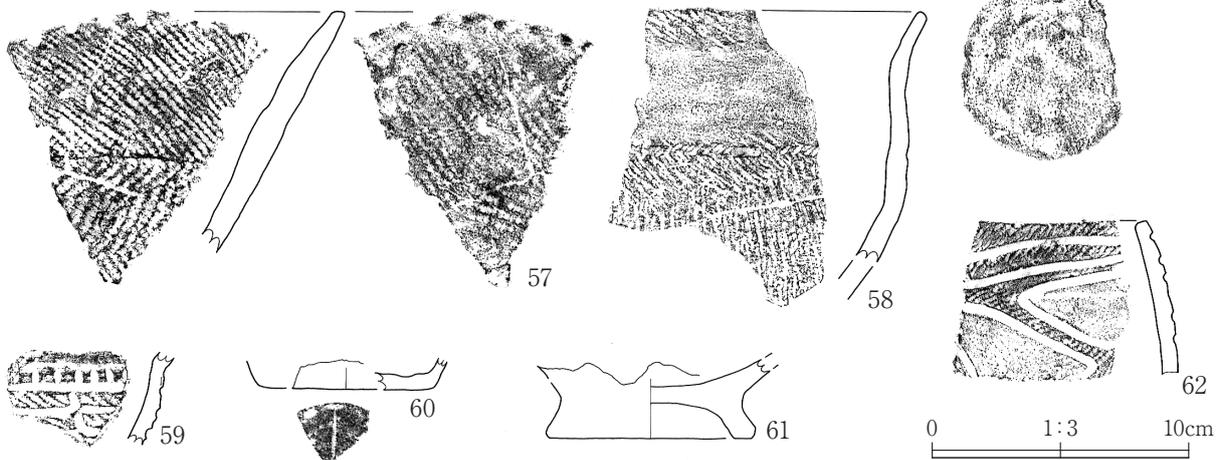
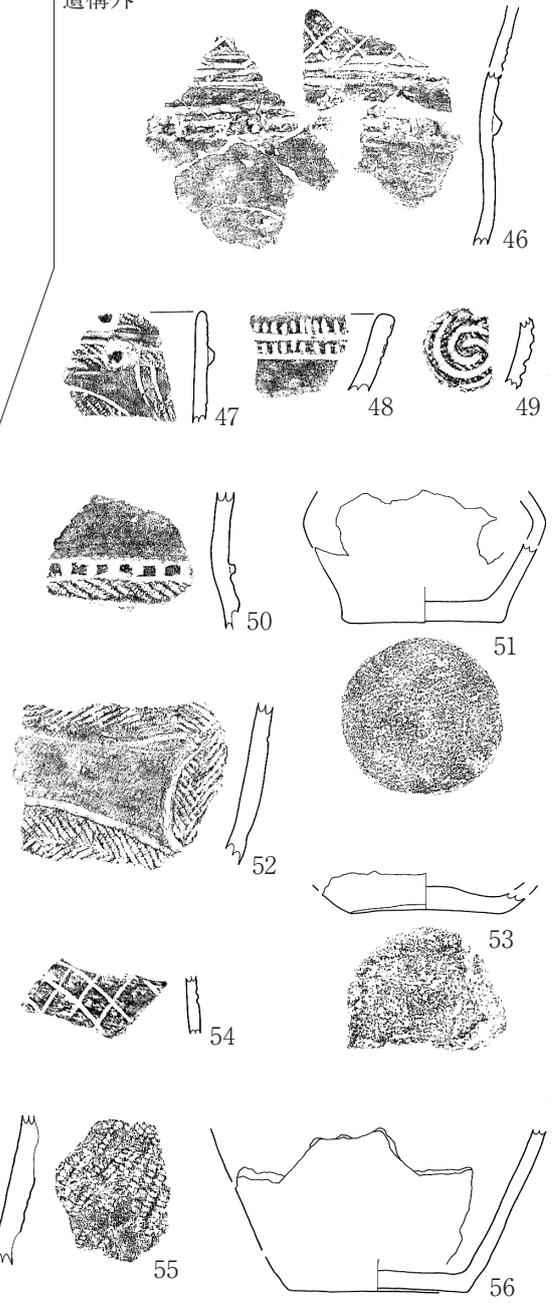


第13図 遺構内出土遺物(3)

1号土坑

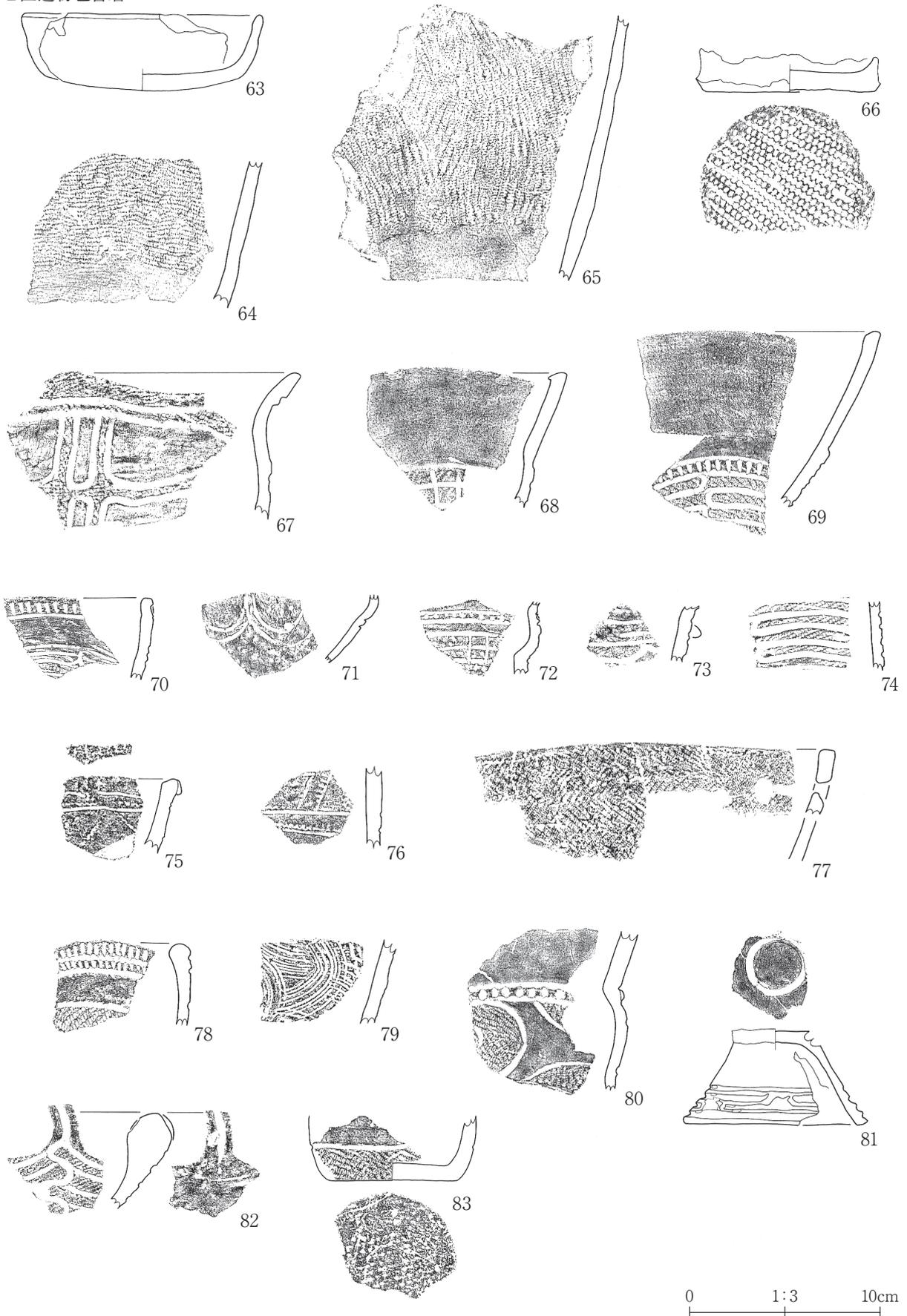


遺構外

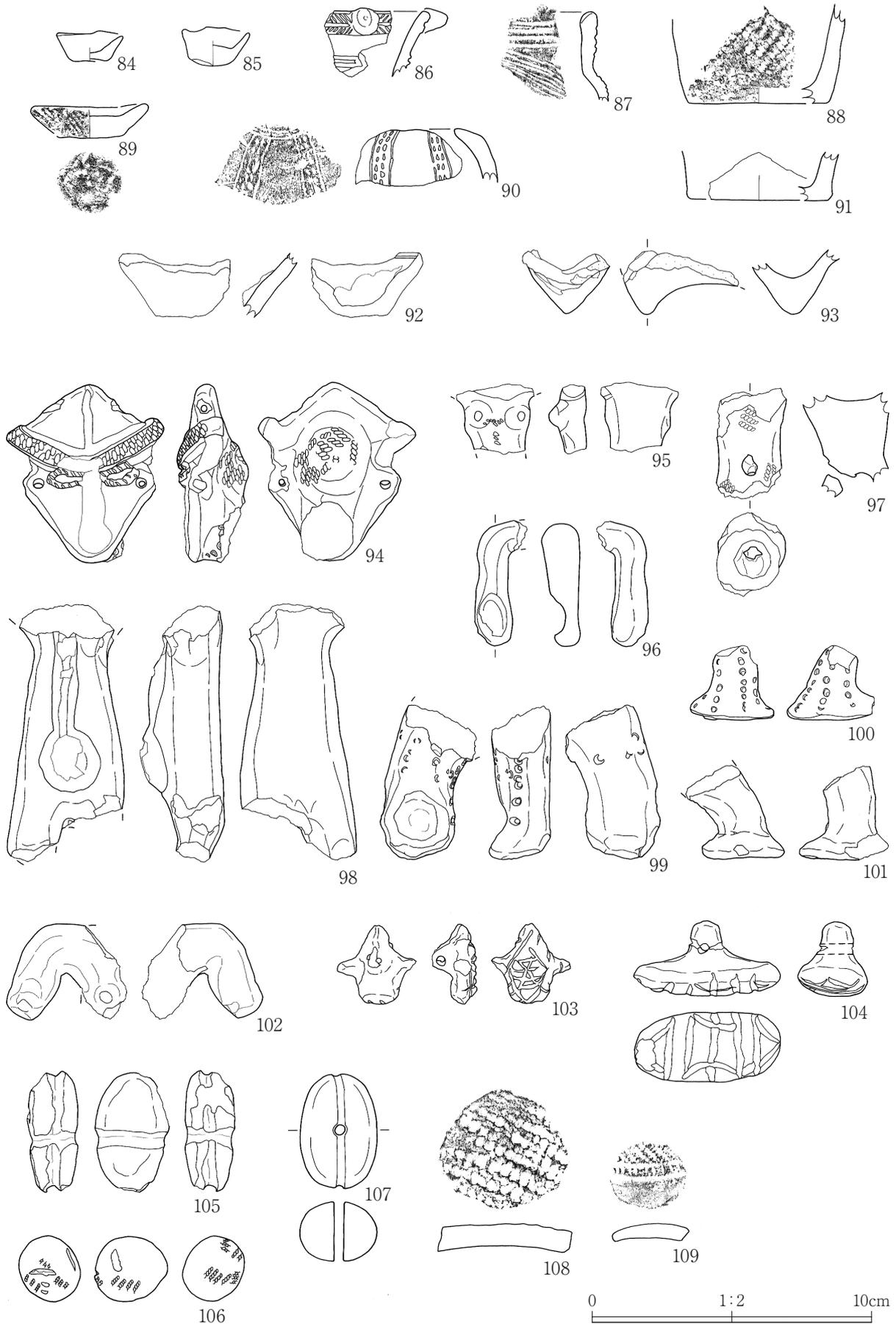


第14図 遺構内出土遺物(4)、遺構外出土遺物(1)

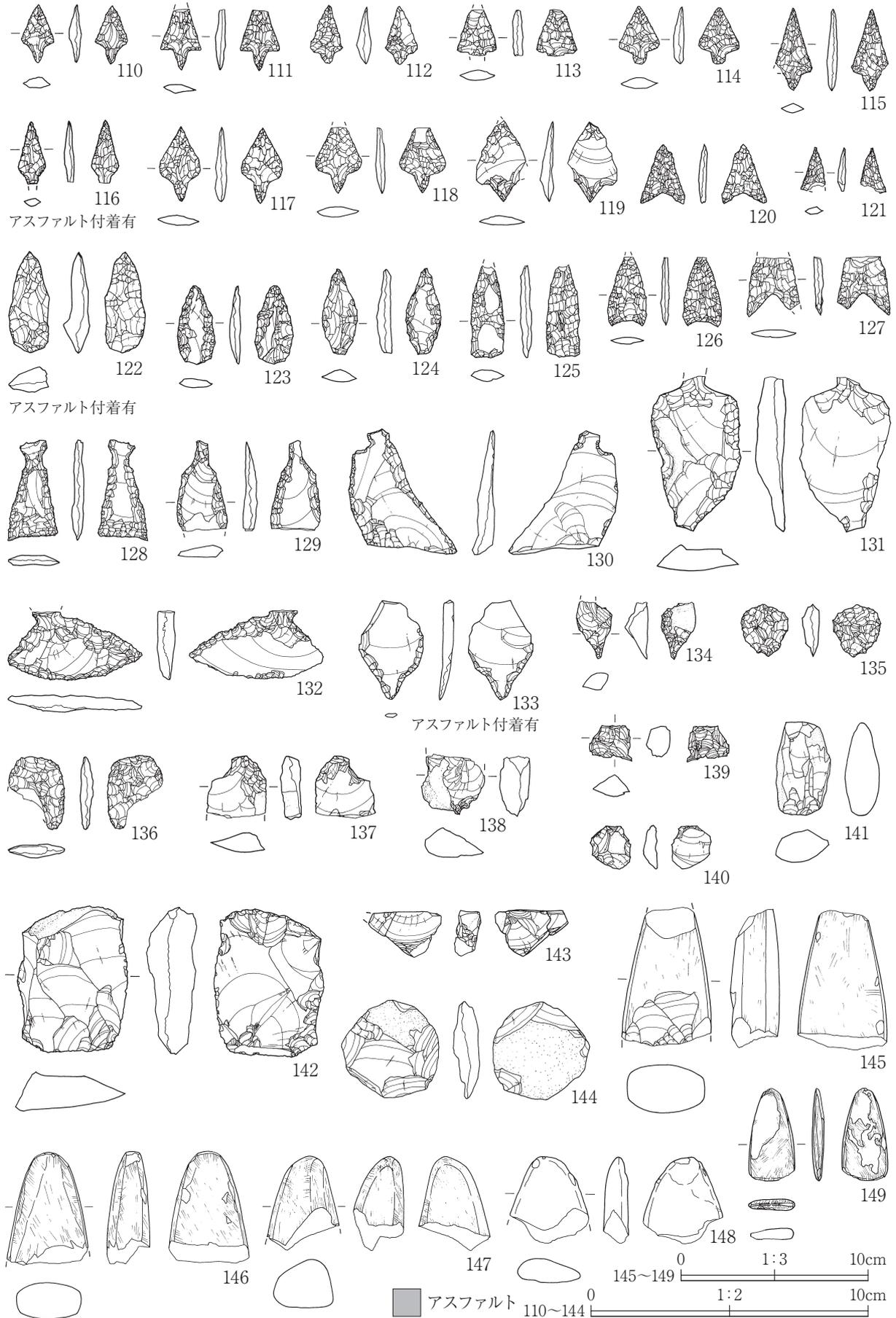
B区遺物包含層



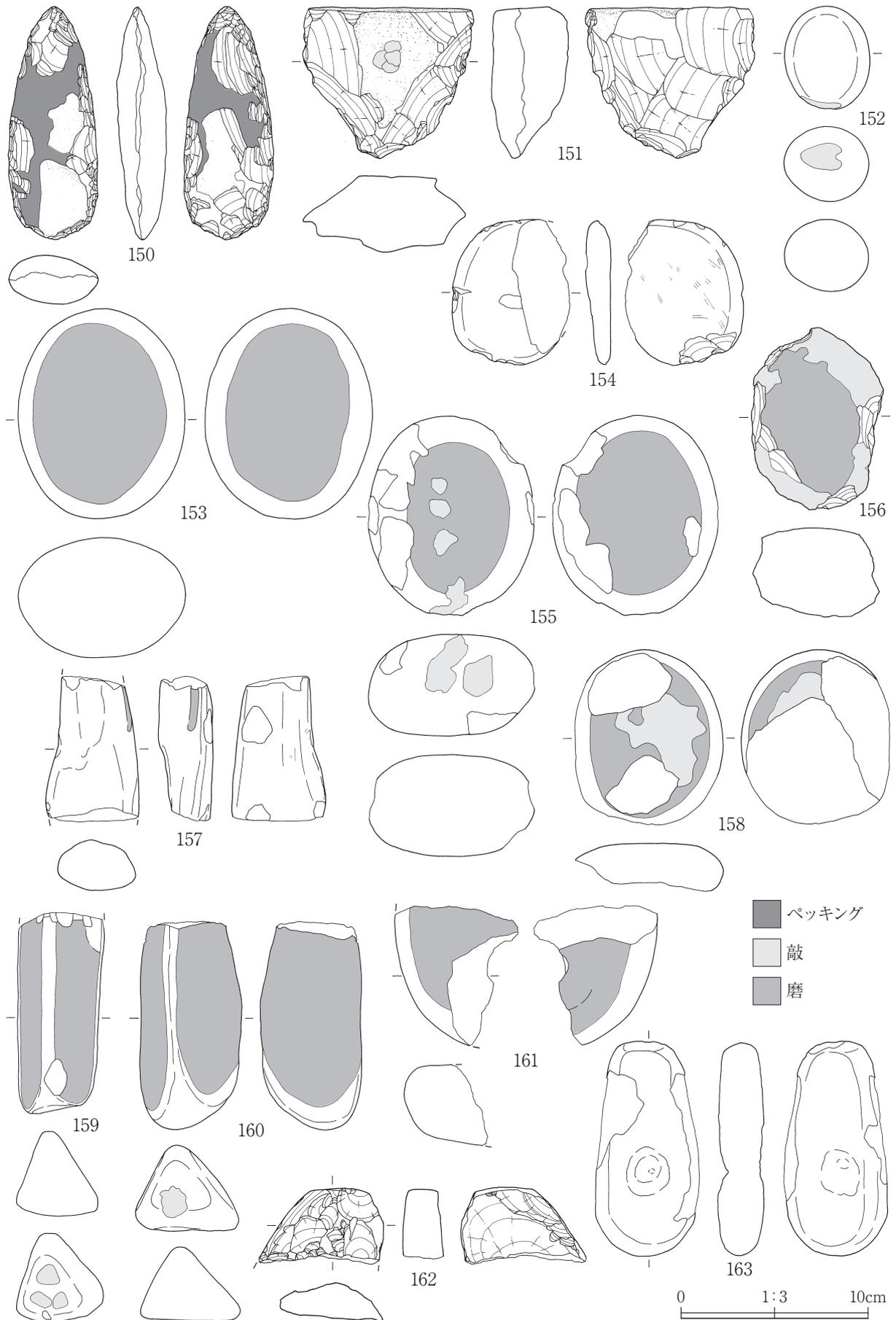
第15図 遺構外出土遺物(2)



第16図 土製品



第17図 石器(1)



第18図 石器(2)

第5表 土器観察表(1)

掲載 番号	出土状況		時 期	器種	法 量(cm)			残存部位	外 面	内 面	胎 土	図版	写真
	地 点	層位			口径	底径	器高						
1	2号竪穴住居跡	埋土	後期中葉	深鉢	(11.0)	-	<3.1>	口縁部	LRL(複節)タテ・ヨコ→ 沈線	横方向調整 輪積み痕あり	石英少量・ 雲母微量含 む	11	15
2	2号竪穴住居跡	埋土	後期中葉	小型壺	-	-	-	口縁部	波状口縁 LRヨコ→楕円形状沈線→ 刺突	横方向調整		11	15
3	2号竪穴住居跡	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁部	LRヨコ→4条1単位沈線	横方向調整		11	15
4	2号竪穴住居跡	埋土	後期前葉～ 中葉	深鉢	-	-	-	胴部	LRLタテ・ヨコ→沈線	横方向調整		11	15
5	2号竪穴住居跡	埋土	後期前葉～ 中葉	深鉢	-	-	-	胴部	LRL→沈線→磨消	横方向調整	小石少量	11	15
6	2号竪穴住居跡	床面 直上	後期中葉	小型壺	6.5	3.6	9.7	欠損なし	口縁：やや丸みを帯びる。 横・斜方向ナデ 頸部：横方向ナデ 胴部：横方向ナデ 底部： ケズリ痕あり			11	15
7	2号竪穴住居跡	床面 直上	後期	浅鉢	(11.8)	-	4.0	欠損なし	口縁：丸縁 横方向調整 丸底	横方向調整	雲母少量含 む	11	15
8	2号竪穴住居跡	床面 直上	後期中葉	小型 深鉢	-	4	<5.4>	胴～底部	RL異方向羽状 底部付近 は無文	横方向調整 輪積み痕あり	石英少量含 む	11	15
9	2号竪穴住居跡	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	頸～胴上部	頸部：RL異方向羽状縄文 →沈線 胴部：RL異方向羽状縄文 →沈線(横・斜)	横方向調整 すず付着	雲母微量含 む	11	15
10	2号竪穴住居跡	埋土	後期後葉	注口	-	-	-	頸～胴部	頸部：粘土粒貼付 胴部：粘土粒貼付 注口 は穿孔後粘土貼付→沈線	縦方向調整	雲母少量含 む	11	15
11	2号竪穴住居跡	埋土	後期	深鉢	-	6.1	<2.0>	底部	横方向調整 底部に木葉 痕(笹?)	横方向調整		11	15
12	3号竪穴住居跡	埋土	後期中葉	小型 深鉢	11.0	4.8	8.1	欠損なし	口縁：平縁 LR異方向羽状縄文→沈 線区画→磨消	横方向調整		11	15
13	3号竪穴住居跡	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	口縁部	櫛書文(横・円形)	横方向調整		11	15
14	4号竪穴住居跡 Q2付近	埋土	後期後葉	深鉢	-	-	-	口縁部	小突起 口縁：列状刺突 胴部：RL→沈線→磨消 粘土粒剥落痕有	横方向調整	少量含む	11	15
15	4号竪穴住居跡 Q2付近	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁～胴部	口縁：刻目文 沈線 胴部：沈線 列状刺突	横方向調整	雲母微量含 む	11	15
16	4号竪穴住居跡 B区上段 DL31杭 付近	埋土	後期	深鉢	-	-	-	口縁～胴部	LRヨコ LR縦	横方向調整		11	15
17	4号竪穴住居跡 南北ベルト	埋土	後期中葉	壺	-	-	<11.5>	頸～胴上部	突起貼付 LR異方向羽状 縄文→沈線→区画外磨消	横方向調整		11	15
18	4号竪穴住居跡	埋土	後期中葉	深鉢	(18.0)	-	<14.7>	口縁～胴上 部	口縁：丸縁 LR→沈線→磨消 胴部：LR異方向羽状縄文 →沈線→磨消	横方向調整	雲母微量	11	15
19	4号竪穴住居跡 Q3	埋土	後期後葉	深鉢?	-	-	-	口縁部	口縁：粘土粒貼付	横方向調整		11	15
20	4号竪穴住居跡	埋土	後期後葉	注口	(6.4)	-	<3.3>	口縁～胴部	口縁：無文 胴部：沈線、沈線→刺突、 隆線→刺突 粘土貼付→ 沈線	横方向調整、 輪積み痕あり		11	15

()は推定値 < >は残存値

第6表 土器観察表(2)

掲載 番号	出土状況		時 期	器種	法 量(cm)			残存部位	外 面	内 面	胎 土	図版	写真
	地 点	層位			口径	底径	器高						
21	4号竪穴住居跡 Q2付近	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	口縁	平縁 4条1単位沈線 すす付着	横方向調整 輪積み痕あり	多量含む	11	16
22	4号竪穴住居跡 Q3	埋土	後期前葉～ 中葉	壺	-	-	-	胴上部	RL→沈線→ 刺突	横方向調整	少量含む	11	16
23	4号竪穴住居跡	埋土	後期後葉	注口	(6.0)	3.0	<9.5)	口縁～底部	口縁：突起、沈線 胴部：沈線、粘土粒貼付	横方向調整	混入少量含む	12	16
24	4号竪穴住居跡 南北ベルト	埋土	後期	注口	-	4.6	4.5	頸～底部	横方向調整 上げ底	横方向調整	雲母微量	12	16
25	4号竪穴住居跡 I A9h	埋土	後期中葉	壺	(5.8)	-	<5.4)	頸～胴上半	頸部：刻目文 胴部：沈線	横方向調整、 輪積み痕あり	雲母少量含む	12	16
26	4号竪穴住居跡	埋土	後期後葉	台付	(6.4)	4.8	<5.2)	口縁～脚部 (突起部欠損)	口縁：3単位の台状突起 台部：沈線・粘土粒貼付 脚部：無文	横方向調整・ 無文・粘土付 足痕あり	雲母少量含む	12	16
27	5号竪穴住居跡埋 土下位 焼土中ベルト B区上段北側	埋土 中	後期	深鉢	-	-	-	口縁～胴部	LRタテ	横方向調整		12	16
28	5号竪穴住居跡 Q4	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	突起	三角状突起 沈線 刺突	多方向調整	雲母微量	12	16
29	5号竪穴住居跡埋 土下位 焼土中ベルト	埋土	後期中葉	浅鉢	(19.0)	(4.0)	5.6	欠損なし	RL異方向羽状縄文 口縁 やや肥厚	横方向調整	雲母少量	12	16
30	5号竪穴住居跡	埋土	後期前葉～ 中葉	浅鉢	(10.0)	-	-	口縁部	口縁：丸縁 LRLヨコ→沈線→磨消	横方向調整	多量何が？	12	16
31	5号竪穴住居跡埋 土上位 2号焼土付近	埋土 上位	後期中葉	深鉢	(17.4)	-	-	口縁～胴上 部	口縁：LR、沈線、列状刺突 胴部：LR→沈線→磨消	横方向調整 輪積み痕有	雲母少量	12	16
32	5号竪穴住居跡埋 土上位 2号焼土付近	埋土 上位	後期中葉	深鉢	(17.4)	-	-	口縁～胴上 部	口縁：LR、沈線、列状刺突 胴部：LR→沈線→磨消	横方向調整 輪積み痕有	雲母少量	12	16
33	5・4号竪穴住居 跡	埋土	後期前葉	台付	(9.0)	(8.0)	8.0	台～脚部	台部：6条1単位櫛書文 脚部：4条1単位櫛書文	横方向調整	雲母少量含む	12	17
34	5号竪穴住居跡	埋土 上位	後期	深鉢	-	-	-	口縁部	口唇：RL 口縁：RL→沈線	一部RL	なし	12	17
35	5号竪穴住居跡	埋土	早期	浅鉢	-	-	-	口縁部	丸縁 RL	RL 沈線	多量含む	13	17
36	5号竪穴住居跡	埋土	後期	深鉢	-	-	-	口縁部	赤彩	横方向調整 赤彩	少量含む	13	17
37	5号竪穴住居跡	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	胴部	2条1単位沈線	横方向調整 輪積み痕あり	多量含む	13	17
38	5号竪穴住居跡	埋土 下位	後期	深鉢	-	-	-	胴部上半	無文 RLヨコ 沈線	横方向調整	混入なし	13	17
39	1号土坑	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	口縁～底部	口縁：無文 原体側圧 L Rヨコ LRタテ			13	18
40	1号土坑	埋土	後期	深鉢	(14.0)	-	<6.9)	口縁～胴上 半	横方向調整 すす付着	横方向調整	雲母少量	13	17
41	1号土坑	埋土	後期中葉～ 後葉	深鉢	-	-	-	口縁部	平縁 LR+原体側圧 無文帯 原体側圧 RL異方向羽状 縄文	横方向調整	少量含む	13	17
42	4号土坑	埋土	後期後葉	壺？	-	-	-	口縁部	沈線 矢羽状沈線 粘土 粒貼付	横方向調整	雲母微量	13	17
43	8号土坑	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	胴部	網目状捺糸文(1)	横方向調整	多量含む	13	17
44	1号埋設土器	埋土	中期後葉	深鉢	-	8.9	<13.6)	胴下半～底 部	捺糸(r) タテ	横方向調整、 輪積み痕あ り、すす付着	混入物少量 含む	13	17

()は推定値 < >は残存値

第7表 土器観察表(3)

掲載 番号	出土状況		時期	器種	法量(cm)			残存部位	外面	内面	胎土	図版	写真
	地点	層位			口径	底径	器高						
45	I号土坑	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	口縁~底部	口縁:無文 原体側圧 L Rヨコ L Rタテ			14	17
46	I A 7 g、8 h、9 h	埋土	後期後葉	深鉢	-	-	-	口縁~胴部	頸部:縄文(原体不明)→ 格子状沈線 沈線 胴部:横方向調整 粘土 粒貼付 すす付着	横方向調整 輪積み痕有	雲母少量含 む	14	18
47	I A 8 j	埋土	後期後葉	深鉢	-	-	-	口縁部	丸縁 RLヨコ→粘土粒貼付 沈 線→磨消	横方向調整 輪積み痕有		14	17
48	I A 8 j	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁部	平縁 沈線→刺突	横方向調整 輪積み痕有	多量含む	14	17
49	I A 8 j	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	胴部	RLタテ→渦巻状沈線	横方向調整	少量含む	14	17
50	I A 8 j	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	胴部	RL→粘土紐貼付、刻目文	横方向調整 輪積み痕あり	少量含む	14	17
51	I A 8 j	埋土	後期	注口	-	6.0	<5.2>	胴~底部	横方向調整 施文なし 平 底	横方向調整 輪積み痕あり	雲母少量含 む	14	17
52	I A 8 j	埋土	後期中葉	-	-	-	-	胴部	RL異方向羽状縄文→沈線 →区画外磨消	横方向調整	小石微量 混入物多量 含む	14	17
53	I A 8 j	埋土	前期	深鉢	-	(6.0)	<1.7>	底部	横方向調整	横方向調整 輪積み痕で剥 落	雲母少量、 繊維少量含 む	14	17
54	I A 9 h	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	胴部	格子状沈線	横方向調整	微量含む	14	17
55	I A 9 h	埋土	早期	深鉢	-	-	-	胴部	LRタテ	LRタテ	繊維混入	14	17
56	I A 9 h	埋土	後期	深鉢	-	7.0	<6.5>	胴下半~底 部	横・縦方向調整、すす付 着 やや上げ底	横方向調整	雲母微量	14	19
57	I A 9 i	埋土	前期前葉	深鉢	-	-	-	口縁~胴部	口縁:小波状口縁 胴部:RL方向羽状縄文	RL縄文?	繊維混入	14	19
58	I A 10 i	埋土	前期前葉	深鉢	-	-	-	口縁~胴部	丸縁 RLヨコ 頸部:無文 胴部:短軸絡 1類(撚糸文)Rタテ+ナナメ →原体側圧	横方向調整 輪積み痕あり	微量含む	14	19
59	I A 10 j	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	頸~胴部	刻目文 L Rタテ→沈線	横方向調整		14	19
60	I A 10 j	IV層	不明	深鉢	-	(7.0)	<1.1>	底部	無文 底部:木葉痕	横方向調整	少量含む	14	19
61	I A 10 j	埋土	後期	台付	-	8.0	<2.9>	台底部~脚 部	台部:横方向調整、施文な し 脚部:横方向調整、施文な し	台部:横方向 調整 脚部:横方向 調整 接合痕 有?	小石・雲母 少量	14	19
62	I A 11 j	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	口縁部	LR→沈線→磨消 すす付 着	横方向調整	雲母少量	14	19
63	B区遺物包含層	埋土	後期	浅鉢	(12.8)	-	4.1	口縁~底部 丸底	横方向調整、施文なし	横方向調整、 すす付着	混入物多量	15	19
64	B区遺物包含層	埋土	後期	深鉢	-	-	-	胴部	RLタテ 横方向調整	縦方向調整 輪積み痕あり		15	19
65	B区遺物包含層	埋土	後期	深鉢	-	-	-	胴部	RLヨコ すす付着	横方向調整 輪積み痕あり	少量含む	15	19
66	B区遺物包含層	埋土	後期	深鉢	-	9.2	<2.3>	底部 平底	横方向調整 縄文圧痕	横方向調整、 輪積み痕あり		15	19

()は推定値 < >は残存値

第8表 土器観察表(4)

掲載 番号	出土状況		時 期	器種	法 量(cm)			残存部位	外 面	内 面	胎 土	図版	写真
	地 点	層位			口径	底径	器高						
67	B区遺物包含層	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁部	波状口縁 RLタテ→沈線(方形区画)	横方向調整 輪積み痕あり	雲母微量	15	19
68	B区遺物包含層	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁部	無文帯 横方向調整 LRヨコ→沈線	段付き 横方 向調整 輪積 み痕あり	少量含む	15	19
69	B区遺物包含層	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁～胴部	RLタテ→沈線(タテヨコ)	横方向調整	雲母少量、 繊維少量含 む	15	19
70	B区遺物包含層	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁部	平縁 刻目文 沈線	横方向調整 輪済み痕あり	少量含む	15	19
71	I A8h	埋土	後期前葉	浅鉢	-	-	-	胴部	横方向調整→弧状沈線	横方向調整	多量含む	15	19
72	B区遺物包含層	埋土	後期中葉	注口	-	-	-	胴部	刻目文 沈線 刺突	横方向調整	少量含む	15	19
73	B区遺物包含層	埋土	後期後葉	注口	-	-	-	胴部	RLRタテ→沈線→粘土粒 貼付	横方向調整	少量含む	15	19
74	B区遺物包含層	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	胴部	LR→U字状沈線	横方向調整	少量含む	15	19
75	B区遺物包含層	埋土	早期	深鉢	-	-	-	口縁部	粘土粒貼付 口縁部：貝殻腹縁 横位 沈線 貝殻腹縁	横方向調整	繊維混入	15	19
76	B区遺物包含層	埋土	早期	深鉢	-	-	-	口縁部	貝殻腹縁、粘土粒貼付	横方向調整		15	19
77	B区上段Ⅲ層北 断面付近	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁部	平縁 補修孔あり RL異方向羽状縄文	横方向調整	少量含む	15	19
78	南側調査区北トレ	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁部	肥厚口縁 刻目文 RL異方向羽状縄 文→沈線	横方向調整 輪済み痕あり	多量含む	15	19
79	B区試掘トレンチ	埋土	後期前葉	深鉢	-	-	-	胴部	8条1単位櫛書文(弧状)	横方向調整	少量含む	15	19
80	B区試掘トレンチ	埋土	後期中葉	深鉢	-	-	-	口縁～胴部	口縁：無文 頸部：刻目文 胴部：RL→沈線→磨消	横方向調整 すず付着	少量含む	15	20
81	B区下段木根	埋土	晩期後葉	台付き	-	9.8	<5.1>	脚部	横方向調整、施文なし 沈線 赤彩あり	横方向調整		15	20
82	B区遺物包含層 攪乱	埋土	後期後葉	深鉢	-	-	-	口縁部	突起 RL→沈線	横方向調整	少量含む	15	20
83	B区遺物包含層 攪乱	埋土	後期中葉	深鉢	-	(6.8)	<3.0>	底部	RL異方向羽状縄文、沈線 底部：文様あり	横方向調整	混入物少量 含む	15	20

()は推定値 < >は残存値

第9表 ミニチュア土器観察表

掲載 番号	出土状況		法量(cm)			残存部位	外面	内面	胎土	図版	写真
	地点	層位	口径	底径	器高						
84	1号竪穴住居跡	床面直上	2.3	1.3	1.1	口縁～底部	無文	無文	雲母少量含む	16	20
85	1号土坑	埋土上位	2.4	1.4	1.4	口縁～底部	無文 やや丸底	横方向調整	多量含む	16	20
86	I A9i、I A9j	黒色土 IV層	-	-	-	口縁部	沈線(横・矢羽根状)+ 粘土粒貼付+刺突 沈線	横方向調整	微量含む	16	20
87	I A9 j	埋土	-	-	-	口縁～胴部	口縁：沈線 胴部：櫛書文	横方向調整	少量含む 雲 母微量含む	16	20
88	1号竪穴状遺構	埋土中	-	(5.0)	(3.6)	胴～底部	LR	横方向調整	少量含む 雲 母微量含む	16	20
89	I A11 j	Ⅲ層	(4.0)	2.3	1.2	口縁～底部	LRクテ	横方向調整	多量含む	16	20
90	I A9i	黒色土	2.0	-	(2.0)	口縁部	口縁：沈線+刺突 胴部：沈線+刺突	横方向調整	微量含む	16	20
91	I A11 j	Ⅲ層	-	(5.0)	(1.7)	胴～底部	無文	横方向調整	微量含む	16	20
92	2号竪穴住居跡	黒褐色～暗褐色	-	-	-	胴部	無文	横方向調整 すす付着 漆 か？一部赤変	少量含む	16	20
93	B区南	Ⅲ層	(2.3)	(4.1)	(3.1)	底部	土器の脚部 内面に アスファルト付着			16	20

第10表 土偶観察表

掲載 番号	出土状況		残存部位	計測値(cm)				文様	図版	写真
	地点	層位		長さ	幅	高さ	重量(g)			
94	I A11 l	I層	顔部	(6.4)	(5.6)	(2.3)	48.43	頭部に穿孔を施す。額のところに粘土紐貼付後LR 施文 目は粘土貼付+刺突+縄文 鼻・口：剥落 耳：穿孔 首：円形刺突 縄文時代後期の土偶	16	20
95	I A11 j	Ⅲ層	胸部	(2.5)	(2.8)	(1.3)	7.6	粘土を貼付乳房を表現している。また縄文を施文す る。	16	20
96	1号竪穴状遺構 No.4	埋土上位	右手	4.5	1.85	1.4	8.43	手のひらを表現するようにくぼみ、無文。	16	20
97	2号竪穴住居跡	埋土	右足？	(4.0)	(2.5)	-	-	先端は円形に広がる。穿孔が施されている。縄文LR	16	20
98	4号竪穴住居跡	埋土	胸下～臀部	-	-	-	-	腹部が膨れる形状を呈する。	16	20
99	2号竪穴住居跡 No.5	埋土上位	右手	(5.5)	(3.4)	(2.2)	33.09	手のひらを表現するようにくぼみ、円形の刺突を施 す。	16	20
100	I A9 j	埋土	右脚部	(2.7)	(3.1)	(3.0)	14.09	円錐形に近い形状を呈する。円形刺突を施す	16	20
101	I A11 j	Ⅲ層	左脚	(3.35)	(3.5)	(3.2)	18.83	無文	16	20
102	4号竪穴住居跡	埋土	胸～右肩	(3.5)	(4.3)	-	-	粘土を貼付乳房を表現している。手のひらをくぼみ で表現する。	16	20
103	2号竪穴住居跡 No.5	埋土上位	全体	2.9	1.8	1.6	4.61	表で顔を、裏面で体全体を表す。表：突起、裏：沈線	16	20

()は推定値 < >は残存値

第11表 土製品観察表

掲載 番号	出土状況		残存部位	計測値 (cm)				文様	図版	写真
	地 点	層位		長さ	幅	厚さ	重量(g)			
104	3号竪穴住居跡	埋土	スタンプ状土製品	-	-	-	-	つまみ部には穿孔、 下部には沈線により文様が刻まれている	16	20
105	I A 8 f	埋土	土錘 先端欠け	4.1	2.7	1.8	19.75	無文 楕円形状を呈し、 長径・短径に沿うように溝を刻む	16	20
106	I A 9 j	埋土	土鈴	2.4	2.2	2.6	10.35	LR、沈線を部分的に施文する 内部に小礫のようなものが含まれている。	16	20
107	SI06 南北ベルト	埋土上位	土錘 欠損なし	4.1	2.8	2.1	26.19	無文 楕円形状を呈し、中心に穿孔。 長径に沿うように溝を刻む	16	20
108	I A 9 j	付近	円盤状土製品	-	-	-	-	外面：RL 刺突 内面：横方向調整	16	20
109	SI06 Q4	埋土上位	円盤状土製品	-	-	-	-	外面：RL 内面：横方向調整	16	20

第12表 石器観察表 (1)

掲載 番号	出土状況		種類	計測値 (cm)				石質	図版	写真
	地 点	層位		長さ	幅	厚さ	重量(g)			
110	2号竪穴住居跡	埋土上位	石鏃	2.1	-	-	0.63	頁岩 古生代 北上山地	17	21
111	4号竪穴住居跡	埋土	石鏃	<2.2>	1.5	0.35	0.87	頁岩 古生代 北上山地	17	21
112	A区3号柱穴状土坑	埋土	石鏃	2.1	1.2	0.5	0.63	頁岩 古生代 北上山地	17	21
113	B区南下段 IV層下面	IV層下面	石鏃	<1.7>	1.4	0.4	0.8	頁岩 古生代 北上山地	17	21
114	T5	Ⅲ層	石鏃	2.1	1.35	0.4	0.85	珪質頁岩 古生代 北上山地	17	21
115	B区下段	IV層	石鏃	2.95	1.35	0.4	0.95	頁岩 古生代 北上山地	17	21
116	4号竪穴住居跡	南北ベルト1層	石鏃	<2.35>	1.05	0.35	0.6	メノウ 古生代 北上山地	17	21
117	5号竪穴住居跡	Q1埋土下位	石鏃	2.7	1.5	0.4	1.07	頁岩 古生代 北上山地	17	21
118	B区遺物包含層	7層No10	石鏃	<2.40>	2.65	3.5	1.1	頁岩 古生代 北上山地	17	21
119	5号竪穴住居跡	埋土上位No4	石鏃	2.9	<1.80>	0.5	1.58	頁岩 古生代 北上山地	17	21
120	B区南上段包含層	Ⅲ層	石鏃	2.1	1.5	0.3	0.56	頁岩 古生代 北上山地	17	21
121	B区下段	I層	石鏃	1.7	0.9	0.3	0.38	頁岩 古生代 北上山地	17	21
122	5号竪穴住居跡	埋土上位No3	石鏃	3.7	<1.45>	0.95	3.72	珪質頁岩 古生代 北上山地	17	21
123	4号竪穴住居跡Q3	埋土	石鏃	2.8	1.4	0.4	1.55	頁岩 古生代 北上山地	17	21
124	I A 9 j	IV層	石鏃	3.1	1.3	0.5	1.91	頁岩 古生代 北上山地	17	21
125	I A 11 j	IV層中	石鏃	<3.35>	1.2	0.45	1.55	頁岩 古生代 北上山地	17	21
126	I A 9 j	IV層	石鏃	<2.45>	1.4	0.3	0.84	頁岩 古生代 北上山地	17	21
127	B区遺物包含層	7層No11	石鏃	<2.15>	1.9	0.35	0.96	頁岩 古生代 北上山地	17	21
128	A区	表採	石匙	3.65	1.8	0.4	2.46	頁岩 古生代 北上山地	17	21
129	2号竪穴状遺構	埋土	石匙	<3.25>	1.8	0.6	2.7	頁岩 古生代 北上山地	17	21
130	I A 9 j	IV層	石匙	4.45	3.9	0.95	6.42	頁岩 古生代 北上山地	17	21
131	I A 9 i	IV層	石匙	5.6	3.3	1.1	15.24	頁岩 古生代 北上山地	17	21
132	I A 9 i	IV層	石匙	<2.50>	4.8	0.6	6.29	頁岩 古生代 北上山地	17	21

< >は残存値

第13表 石器観察表(2)

掲載 番号	出土状況		種類	計測値 (cm)				石質	図版	写真
	地 点	層位		長さ	幅	厚さ	重量(g)			
133	I A 9 i	IV層	石錐 アスファルト付着	3.6	2.3	0.4	2.8	頁岩 古生代 北上山地	17	21
134	I A 9 j	IV層	石錐	<2.10>	1.25	0.8	1.56	珧質頁岩 古生代 北上山地	17	21
135	B区南	I層	スクレイパー	1.9	1.7	0.6	1.55	頁岩 古生代 北上山地	17	21
136	I A 12 j	II層	スクレイパー	<2.65>	2	0.5	2.03	珧質頁岩 古生代 北上山地	17	21
137	I A 9 j	III層	スクレイパー	<2.2>	2.1	0.75	3.25	メノウ 古生代 北上山地	17	21
138	3号竪穴住居跡	ベルト内	剥片	2.1	2.3	1.1	4.72	珧質頁岩 古生代 北上山地	17	21
139	I A 10 o	IV層	剥片	1.2	-	0.9	1.32	メノウ 古生代 北上山地	17	21
140	5号竪穴住居跡	埋土下位	剥片	1.55	1.4	0.5	1.12	メノウ 古生代 北上山地	17	21
141	1号土坑	埋土	剥片	3.35	2.9	1.2	8.83	珧質頁岩 古生代 北上山地	17	21
142	A区上段	I層	剥片	5.4	4	1.8	39.73	頁岩 古生代 北上山地	17	21
143	B区南	IV層	剥片	1.65	2.6	0.9	3.41		17	21
144	B区南	IV層	剥片	3.5	3.5	1	10.6	頁岩 古生代 北上山地	17	21
145	南下段	攪乱	磨製石斧	<7.55>	4.8	2.7	146.35	ヒン岩 中生代白亜紀 北上山地	17	22
146	1号竪穴住居跡	埋土上位	磨製石斧	<6.10>	<4.35>	<2.35>	78.86	砂岩 古生代 北上山地	17	22
147	4号竪穴住居跡	埋土上位	磨製石斧	<5.15>	3.1	2.4	57.54	蛇紋岩 古生代オルドビス紀 早池峰山周辺	17	22
148	西側調査区 T 2	I層	磨製石斧	<4.7>	4.2	1.3	-	頁岩 古生代 北上山地	17	22
149	4号竪穴住居跡	埋土	磨製石斧	5	2.4	0.6	11.24	蛇紋岩 古生代オルドビス紀 早池峰山周辺	17	22
150	4号竪穴住居跡	埋土	磨製石斧	12.55	6.8	2.7	194.98	砂岩 古生代 北上山地	18	22
151	南下段	IV層上面	打製石斧	8.2	9.1	4.1	361.54	頁岩 古生代 北上山地	18	22
152	5号竪穴住居跡	埋土下位	磨敲石	5.6	4.55	3.9	124.6	凝灰岩 古生代 北上山地	18	22
153	1号竪穴住居跡	埋土中	磨敲石	11.4	9	6.5	969.68	砂岩 古生代 北上山地	18	22
154	西側調査区 T 2	I層	石錐	7.85	<6.2>	-	-	ホルンフェルス 古生代(変成または中世代白 亜紀) 北上山地	18	22
155	4号竪穴住居跡	埋土	磨敲石	10.8	8.9	5.5	791.38	花崗岩 中生代白亜紀 北上山地	18	22
156	5号竪穴住居跡	埋土上位No.3	磨敲石	9.8	7.1	4.8	497.1	斑岩 中生代白亜紀 北上山地	18	22
157	南下段	埋土	磨敲石	<7.80>	5	2.95	154.91	ホルンフェルス 古生代(変成または中世代白 亜紀) 北上山地	18	22
158	1号土坑	埋土上位	磨敲石	9.4	7.95	<2.60>	23761	ホルンフェルス 古生代(変成または中世代白 亜紀) 北上山地	18	22
159	1号竪穴住居跡 炉石12	攪乱	磨敲石	<10.9>	4.6	4.6	316.72	デイサイト 中生代白亜紀 北上山地	18	22
160	2号竪穴住居跡 東西ベルト	攪乱	磨敲石	<11.3>	5.4	-	410.749	はんれい岩 中生代白亜紀 北上山地	18	22

< >は残存値

第14表 石器観察表(3)

掲載 番号	出土状況		種類	計測値(cm)				石質	図版	写真
	地 点	層位		長さ	幅	厚さ	重量(g)			
161	1号竪穴住居跡 炉石1	埋土	磨敲石	<7.6>	<6.6>	<4.3>	207.3	花崗閃緑岩 中生代白亜紀 北上山地	18	22
162	2号竪穴住居跡南北ベルト	攪乱	礫器	<4.1>	<6.75>	<2.2>	66.45	安山岩 中生代白亜紀 北上山地	18	22
163	I A9h	IV層	凹石	11.65	5.6	2.75	219.64	砂岩 中生代白亜紀 北上山地	18	22

< >は残存値

物の年代は縄文時代中期中葉と後期前葉から後葉である。縄文時代早期や前期の遺物は斜面部にある遺物包含層からの出土であるため、斜面上部からの流れ込みの可能性が考えられる。石器は剥片石器・礫石器が出土しており、その中でも石鏃の数が多い。礫石器は敲磨石類が多く、その次に磨製石斧が多い。磨製石斧は欠損しているものが多く、未成品は2点のみである。出土遺物の中で磨製石斧や土偶や土鈴などの祭祀に関わる土製品や、石鏃、土錘などの狩猟と漁労に関わる道具が出土している。そのため、九重沢Ⅲ遺跡の周辺では狩猟・漁労・採集生活が行われ、土偶などを用いた祭祀が行われていたと考えることができる。

今回の九重沢Ⅲ遺跡における発掘調査で得られた情報は非常に多い。しかし、報告書で提示できたことは僅かに過ぎず、事実記載に終始し検討がわずかにしか及ばなかった。今後の課題としたい。



遺跡遠景（南西から）



調査区遠景（直上※上が東）

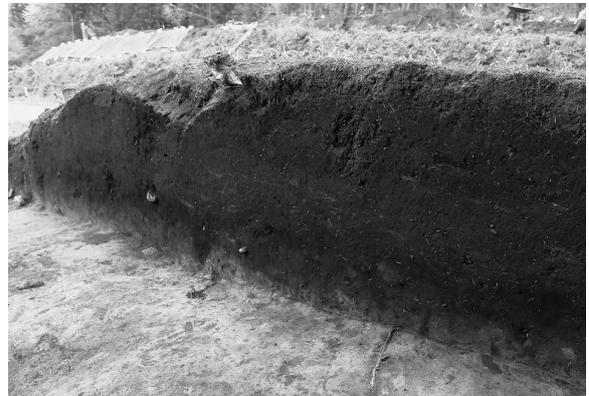
写真図版1 調査区遠景



A区完掘（東から）



B区下段完掘（西から）



A区基本層序断面（北西から）



B区基本層序断面（南西から）



B区トレンチ断面（北東から）

写真図版2 調査区近景、基本層序



完掘（北東から）



断面（北東から）



炉全景（南西から）



炉断面（東から）



炉断面（北西から）



全景（南東から）



断面（東から）



断面（東から）



断面（東から）

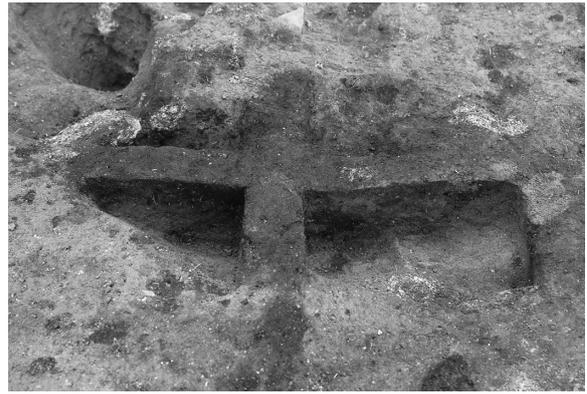


遺物出土状況

写真図版4 2号竪穴住居跡(1)



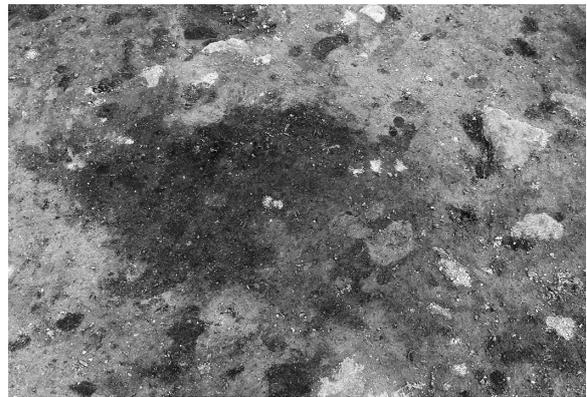
炉全景（南東から）



炉断面（南東から）



炉断面（北西から）



炉検出（北西から）



1号土坑完掘（南東から）



1号土坑断面（南東から）



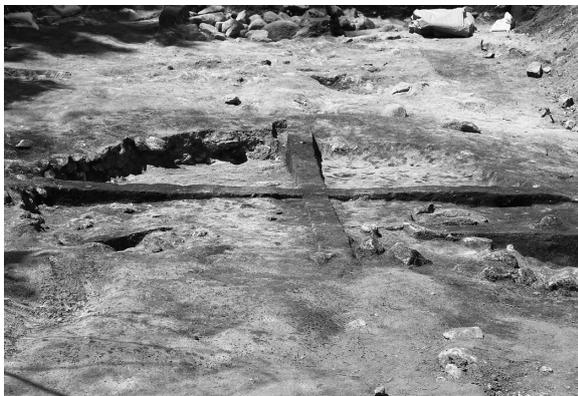
P1 完掘（南東から）



P1 断面（南東から）



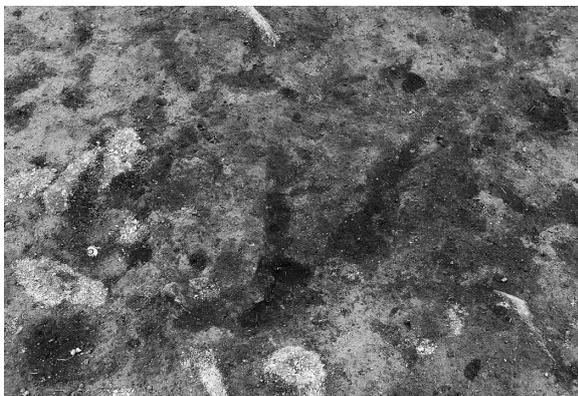
完掘（北から）



断面（東から）



断面（南から）



炉検出（東から）



1号土坑断面（東から）

写真図版6 3号竪穴住居跡



完掘（北東から）



断面（南から）



断面（北西から）



炉断面（東から）



P1 完掘（東から）

写真図版7 4号竪穴住居跡(1)



P3・P4 完掘 (東から)



P7 断面 (北から)



P7 完掘 (北から)



P8 完掘 (南から)



遺物出土状況 (西から)



遺物出土状況 (南東から)



遺物出土状況 (南東から)

写真図版 8 4号竪穴住居跡(2)



完掘（南から）



断面（東から）



断面（西から）



焼土検出状況（南から）



遺物出土状況（西から）



1号竖穴状遺構完掘（南から）



2号竖穴状遺構完掘（南から）

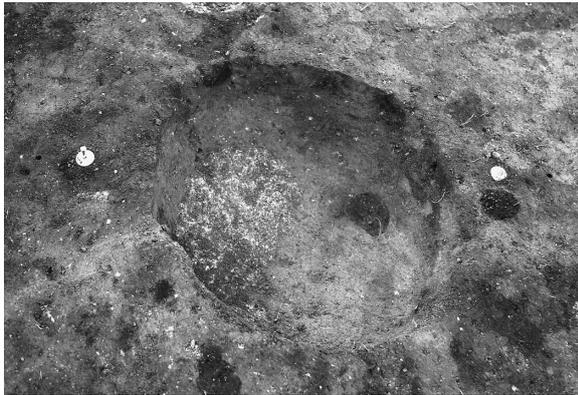
写真図版10 1・2号竖穴状遺構(1)



2号豎穴状遺構断面 (南東から)



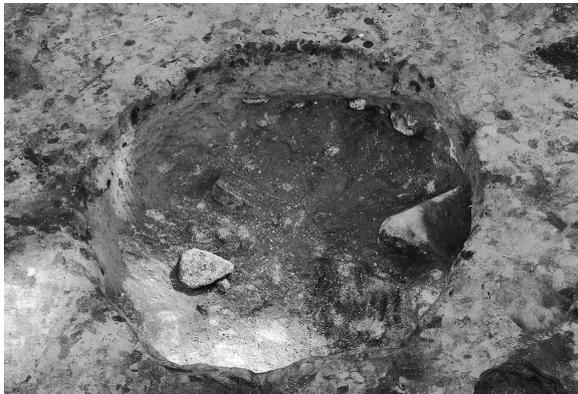
2号豎穴状遺構断面 (南から)



1号埋設土器完掘 (南から)



1号埋設土器断面 (南から)



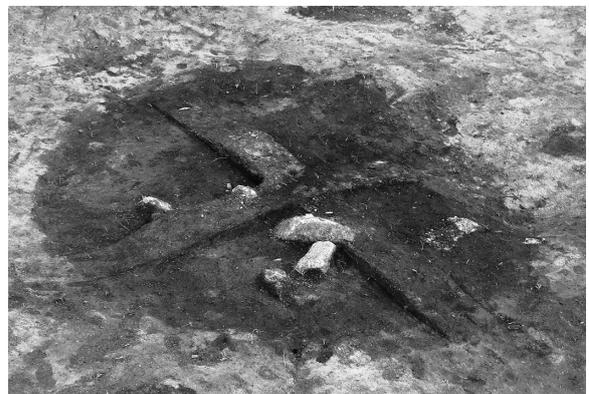
1号土坑完掘 (北から)



1号土坑断面 (西から)



1号土坑遺物出土状況 (南から)



1号土坑検出状況 (南東から)



2・3号土坑完掘（北から）



2・3号土坑断面（北西から）



4号土坑完掘（北から）



4号土坑断面（北から）



5号土坑断面・完掘（北から）



7号土坑断面・完掘（北から）



8号土坑完掘（南から）



8号土坑断面（南から）

写真図版12 2～5・7・8号土坑



9号土坑完掘（北から）



9号土坑断面（北から）



1号焼土確認（東から）



1号焼土断面（東から）



2号焼土確認（北西から）



2号焼土断面（北西から）



3号焼土断面（東から）



4号焼土断面（東から）



A区2号柱穴状土坑完掘（北東から）



A区3号柱穴状土坑完掘（北から）



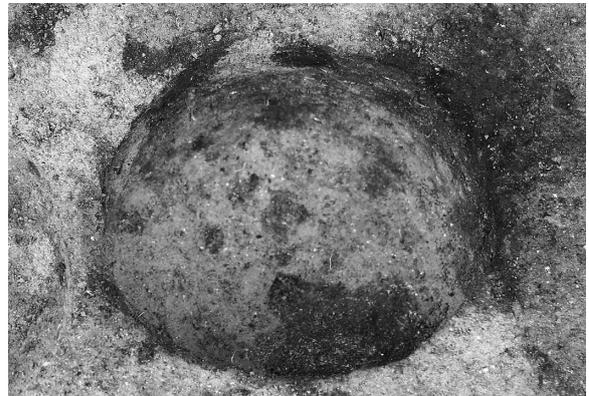
B区1号柱穴状土坑完掘（南東から）



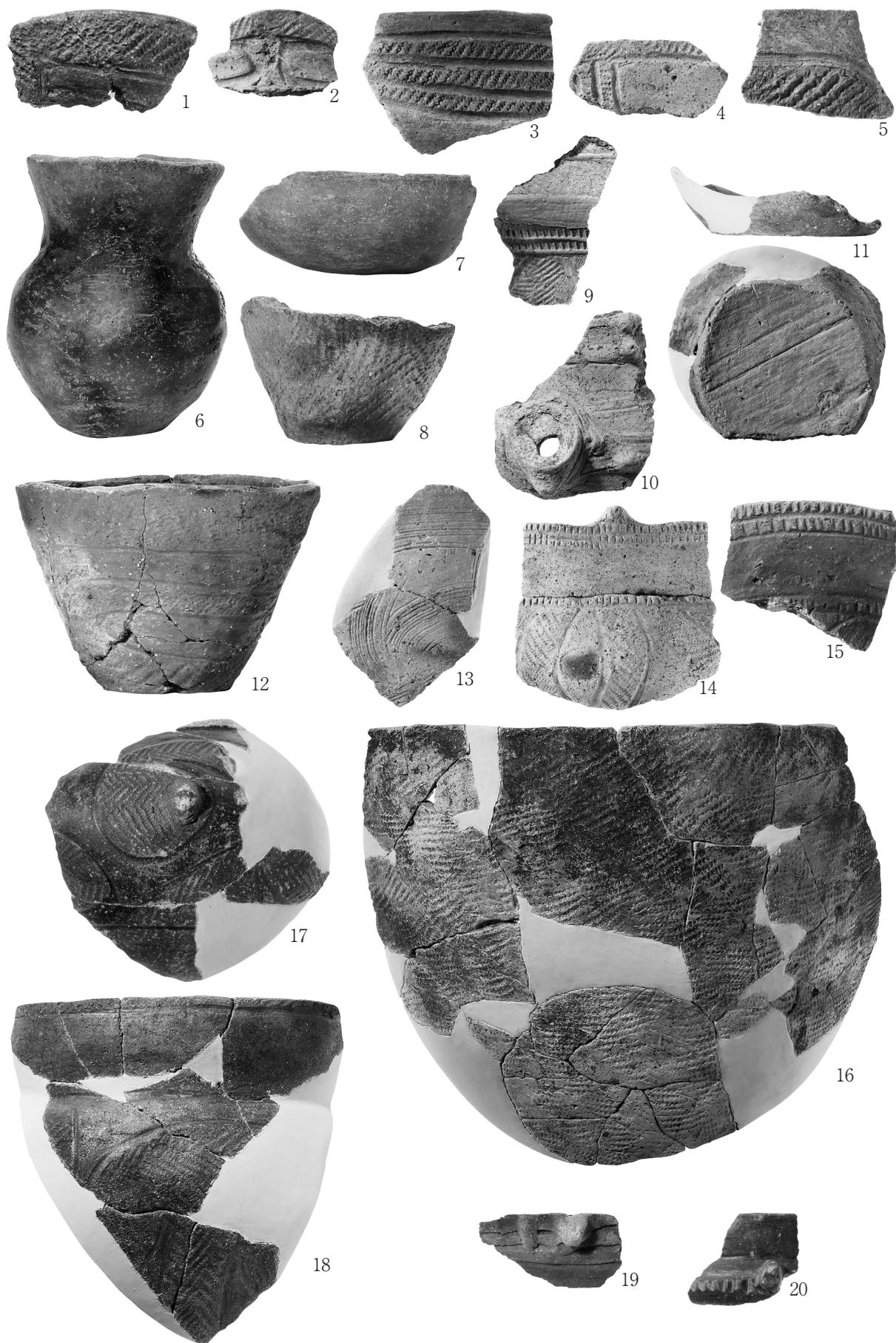
B区2号柱穴状土坑完掘（東から）



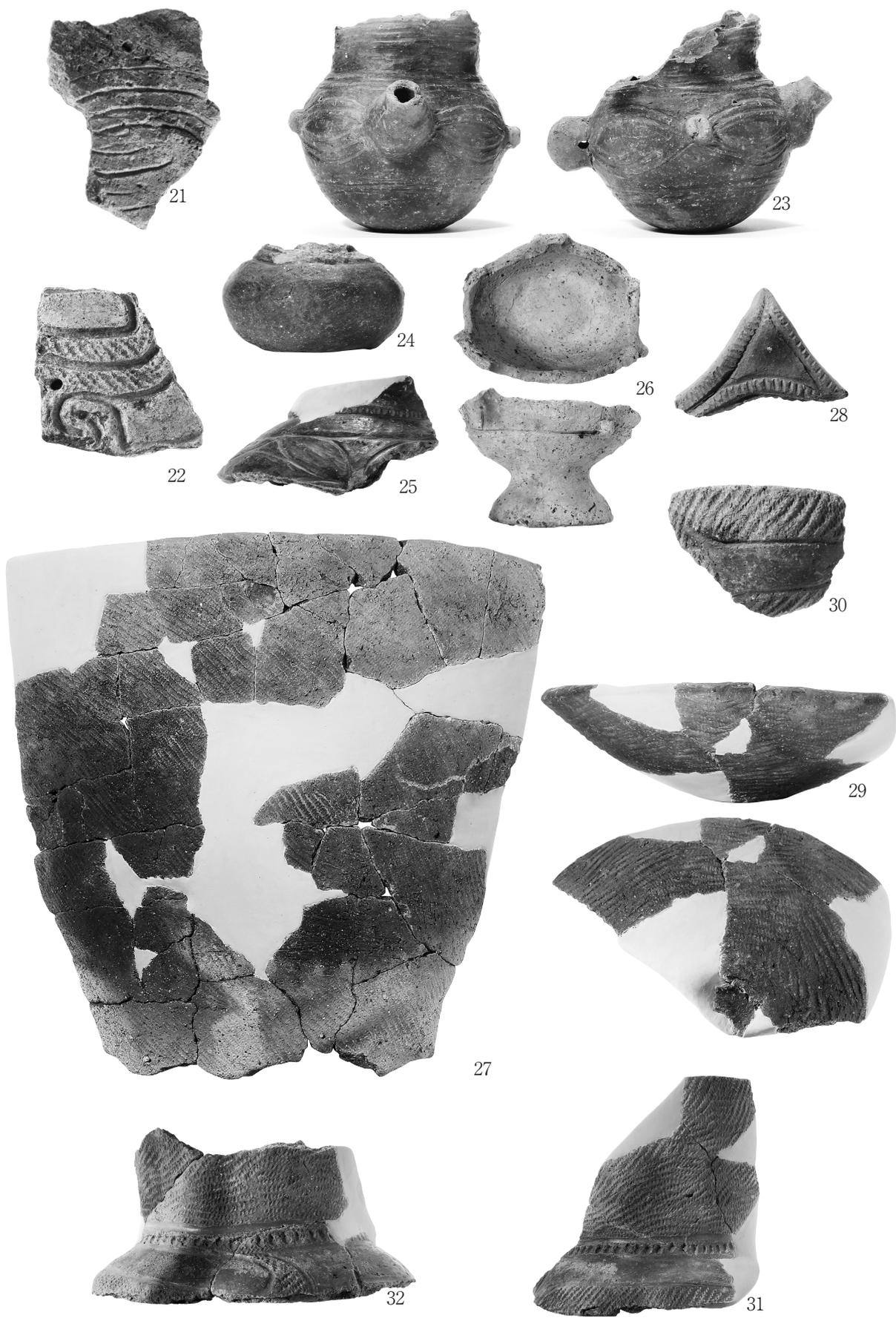
B区3号柱穴状土坑完掘（北から）



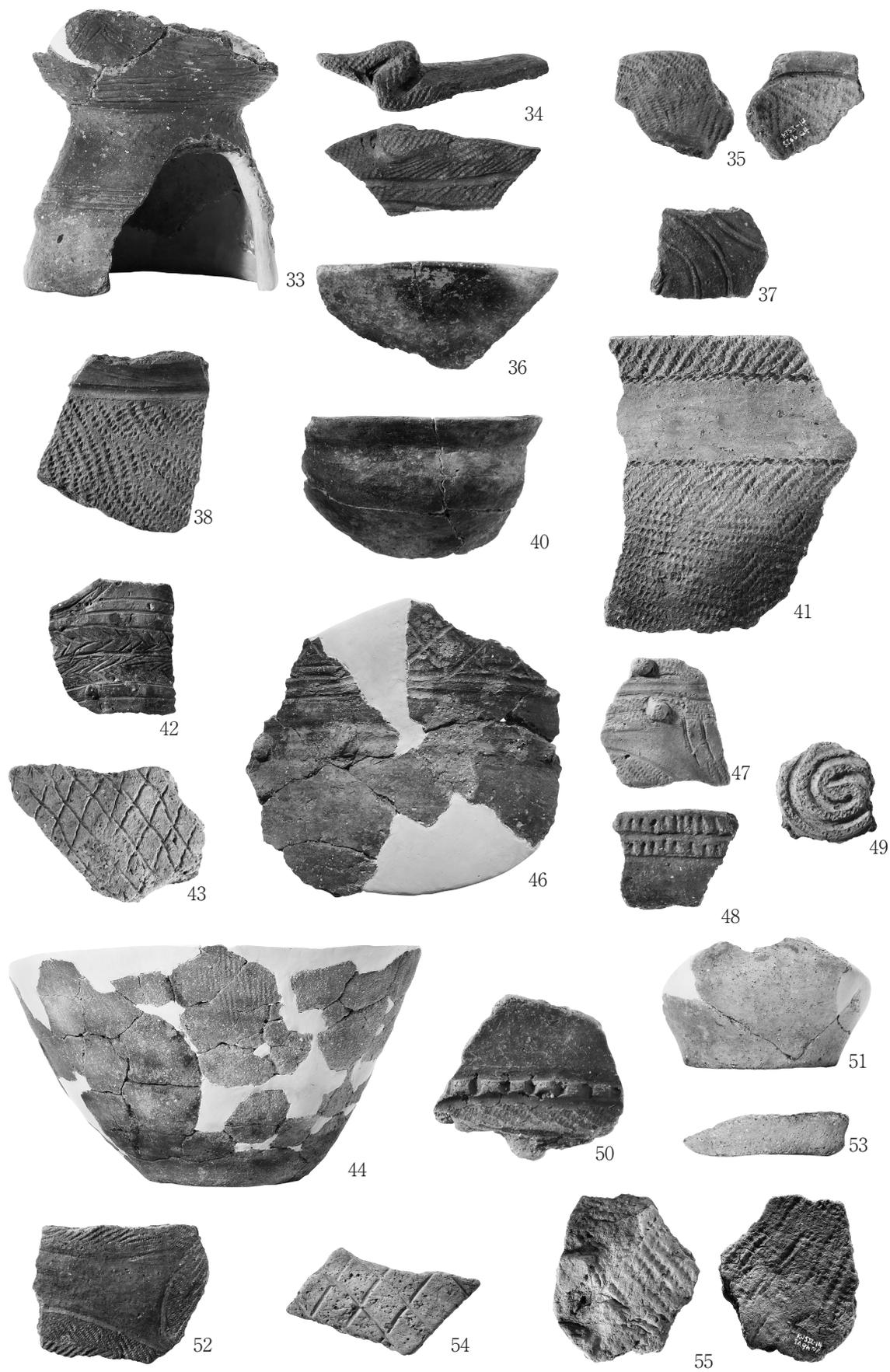
B区5号柱穴状土坑完掘（北から）



写真図版15 出土遺物(1)



写真図版16 出土遺物(2)



写真図版17 出土遺物(3)

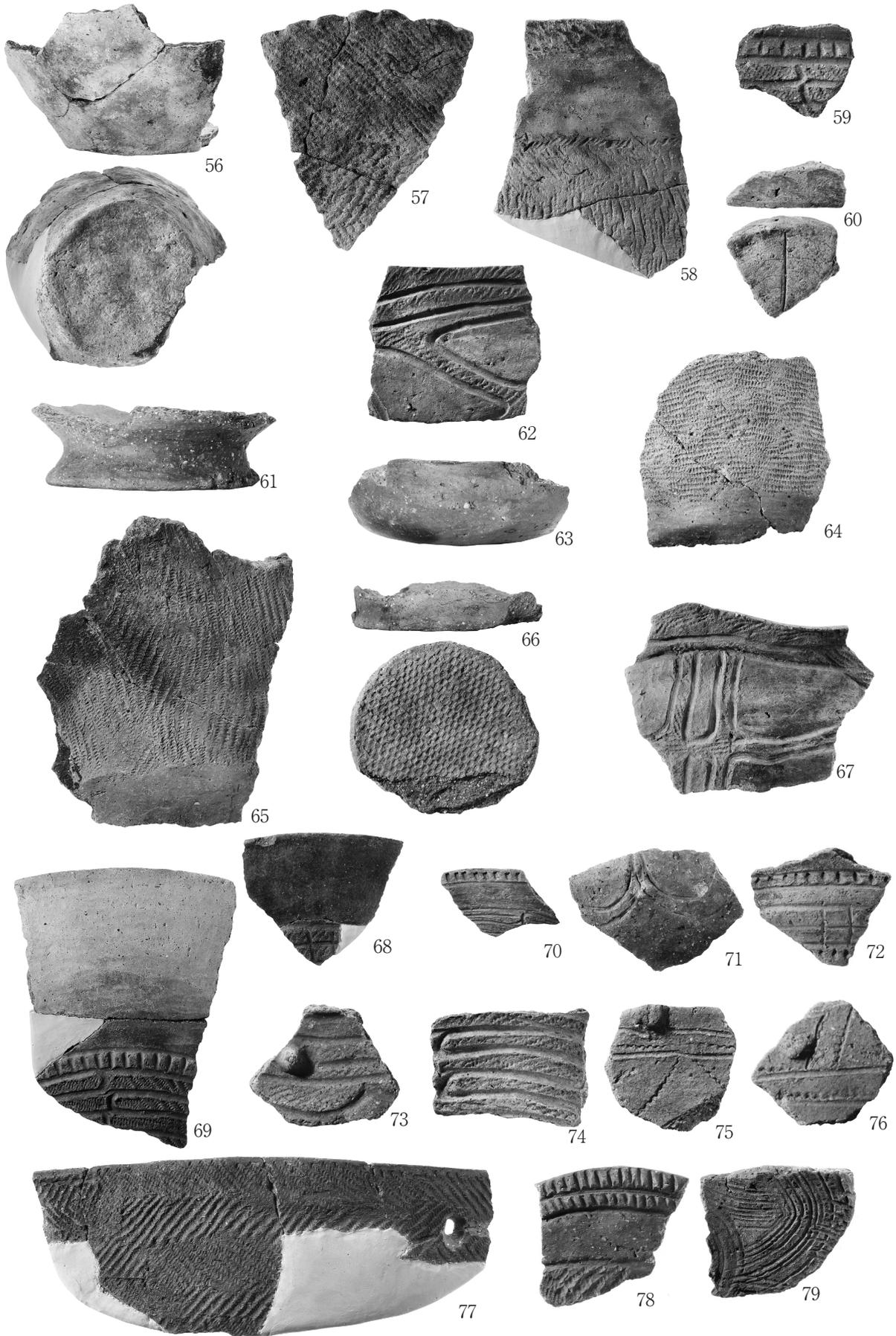


39

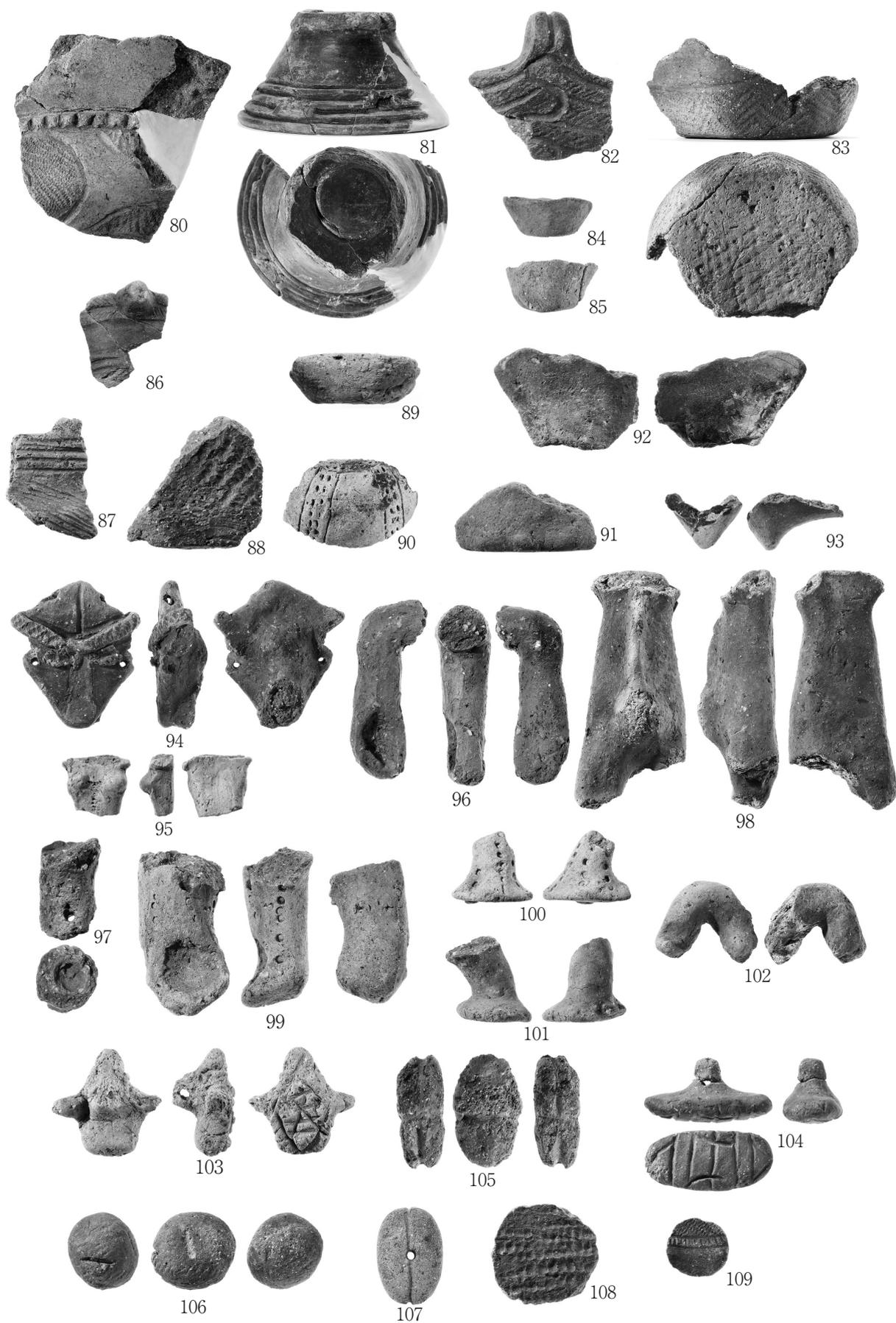


45

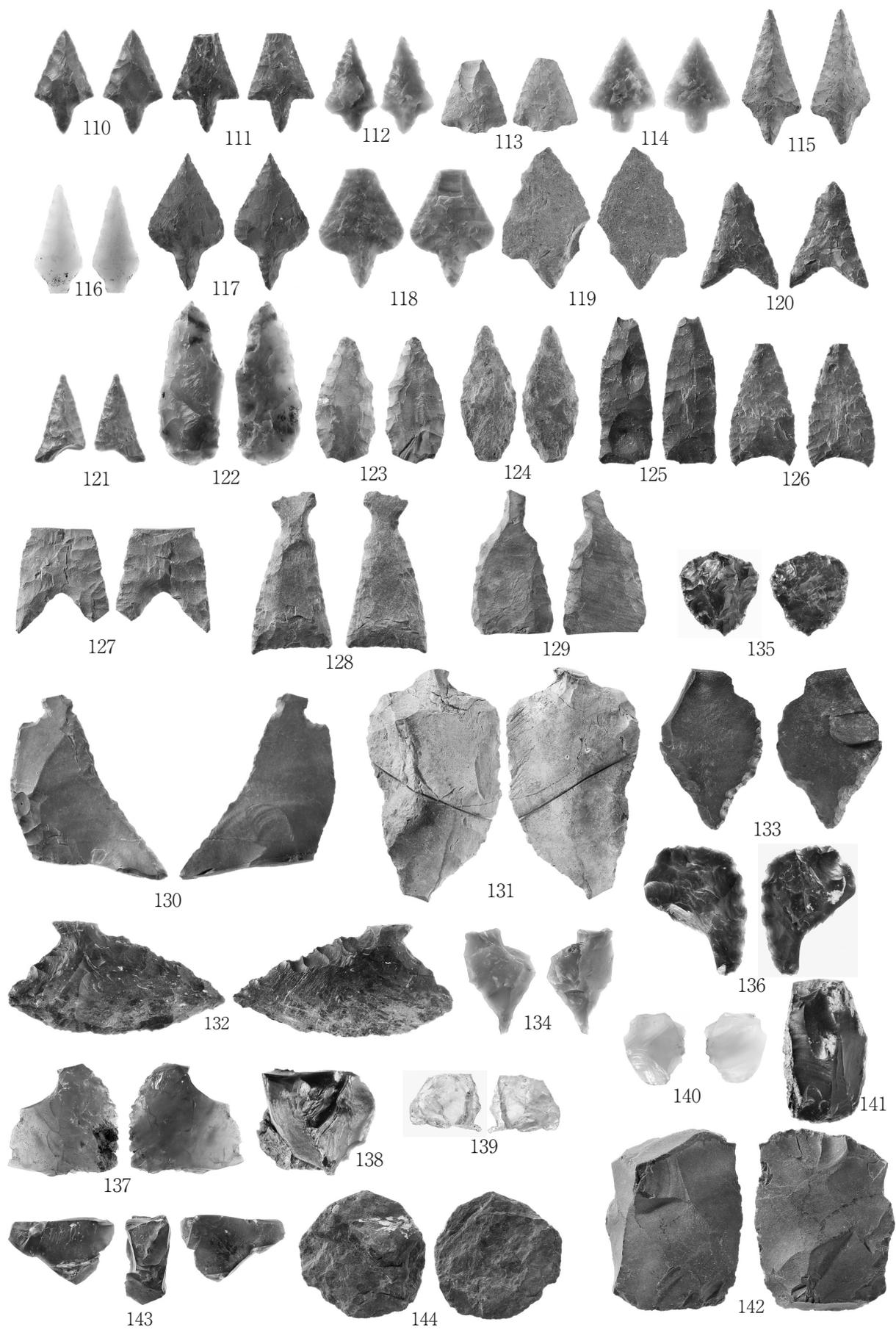
写真図版18 出土遺物(4)



写真図版19 出土遺物(5)



写真図版20 出土遺物(6)



写真図版21 出土遺物(7)



写真図版22 出土遺物(8)